
ビート・メール

sumita

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ビート・メール

【Nコード】

N9119M

【作者名】

sumita

【あらすじ】

乗っていた船が沈没し、死んだと思ったらトリップしてて、おまけに体はミニマムサイズになってました。神様、これって後遺症の一つなんでしょうか。

逆ハーのはずなのに本命以外は煩い小バ工程度です。鬼畜と魔王とヘタレが78%（かもしれない）。

冷たいまどろみ

氷のように冷たい水が私の頬を突き刺す中、その頬にぬくもりが触れる。

そんなのは、ありえないはずなのに。

人間って、どこまで苦しめば死ねるのだろうか。

塩辛い水をどこまで飲んだら？

指一本動かせないほど、全身に深い傷を負ったら？

その二つをクリアしても、私はまだ生きている。

我ながらしぶとい事だ。

灯りの無い真の暗闇を知って、震えたのは体じゃなく心だろう。

視力というものが全く役に立たないこの状況で、頼りになるのは嗅覚と聴覚、それから触覚くらいか。

こんなことになるって分かってたら、あんな船、乗らなかったのに。

まさかタイタニック的なことを体感するなんて無いと思っていたけど。

ああ、もう、いいよ。

暗いと、眠くなっちゃうんだよね。

それに寒いから、もう……。

冷たいまどろみ（後書き）

頑張れ主人公

IN 宝箱

揺れる足場に、強い風。

一瞬の隙が、己の命を危うくする海の戦場。

剣に付いた血を拭いながら、戦利品を持ち帰る戦友の肩を叩いた。

「ライズ」

「おお、アルシファー、お疲れさん」

「それで全部か？」

「多分な」

相手はこの海域を根城とする極悪非道の海賊だった。

船長を始めとする数名は確実に賞金首のはずだ。

奪ったのは奴らが商船や貿易船から略奪した宝と、わずかな食料と水。

宝の内明らかに持ち主が分かるものはそれぞれ返さなければならなし、生かして捕らえた者と残念ながら殺してしまった者は、まとめて巡回中の海軍にでも突き出すのがルールだ。

「これだから海賊の相手は嫌なんだよな」

ぶつぶつ言うライズには同感だ。

面倒なことこの上ない。

俺達は海賊でも商船でも海軍でもないのだから、関わって得することなどほとんど無いのだ。

あることを除けば。

「どうだ？　ありそうか」

「いや、ほとんどが北に持ち込まれるはずの香辛料だな」

海賊から回収した荷物を検分してみるが、俺達の探すものは、ありそうにない。

今回もかと、船員たちも落胆の色を隠せないでいる。

そんな時。

「せんちょー、俺この箱貰ってもいい？」

「マリス！　荷物は改めるまで触れるなど言っているだろうが」

頭にライズの拳骨を落とされて、マリスは頬を膨らませた。

「中身を」

一月前に乗船したばかりの見習いの少年が隠し持っていた小さな木箱に、俺たちは息をのんだ。

探し求めていたものが、ここにあれば。

「アルシファー、早く開けろ」

「わかっている」

複雑な鍵をこじ開け、蓋を上げる。

しかしそこにいたのは、掌ほどの少女だった。

IN 宝箱（後書き）

まだまだこれから

逆ガリバー（前書き）

視点の変化に要注意、です

逆ガリバー

なんだろう。

あったかい、お日様と潮の香りが急に私を襲う。

まぶた越しに感じる日の光はとても強い。

暗いところから明るいところに出るときは、急に眼を開けてはいけないと教わったつけ。

そつとそつと目を開け、光に慣れだしたとき。

「・・・・・・・・」

文字通り声も出せない光景が広がっていた。

でかい影、大きな音、強い日差し。

そして、強烈な潮の香り。

「巨人・・・・・・・・」

ボソツと言っただけなのに、巨人の一人がしっかり拾っていたよう
だ。

「小さいのはお前だ。エルフ、には見えんが」

羽がないしな、なーんて言ってるお兄ちゃん。

えるふ？

エルフ？

エルフ？！

「ライズ、船長はまだ生きてるか？」

「まあ殺さないのが原則だし」

「じゃあ、なんとしても吐かせろ。・・・・お前、どこの町で捕ま
った？ 術式は覚えているか？」

「え、っと」

待て待て。

この人、何を言ってるの？

「マリス、この子を預かっている」

「いえっさー」

「きゃ」

体がぐらりと揺れ、地震かと思ったが違うようだ。

どうやら大人の両手ほどの木箱の中にいるらしい。

……何がどーなってるの？

混乱と困惑

マリス、と呼ばれた少年の掌の上で私は悩んでいた。

何で生きてるんだろう。何で体がちっちゃいんだろう。何でこんな箱に入ってるんだろう。エトセトラ。

もうわかんないよっ！

うがーっとわなわな体を震わせていると、少年が興味津々と言った様子で私に話しかける。

「ねえ、君エルフなの？」

そもそもエルフって。どこのファンタジーだ。

夢の見すぎじゃないかね少年。

ん？ さっきのお兄さんもエルフだとか術式だとか変なこと言ってた気がする。

「違うよ、れっきとした人間」

「ちっちえー」

悪かったわね。好きでこんな風になったわけじゃないのよ？
ていうかどうしてこんな風になったかもわかんないのよ？

「じゃあ、悪い魔法使いのイタズラ？」

・・・魔法使い？

待て待て待て。この少年は夢の見過ぎ程度じゃすまないよ？

でも、待って。

おかしいのは、この子じゃなくて、私かも？

「ねえ、マリス」

「なに？ 小人さん」

にっこり笑う顔が可愛いね。

変なオジサンについてっちゃダメだよ？

「じつって、どこのの？」

「アルナディア王国の東の外れの町、モッソスの港から北東100海里くらいの北ベリリ海のと真ん中に浮かぶルナ・メイル号の船上だよ」

「……非常に丁寧な説明ありがとうございます。」

さっぱり分かりませんがね？

混乱と困惑（後書き）

現在の国際海里は1852メートル。
1里は3927・2メートル。

冷静になるんだ

あるなでいあこうごく？

もっそす？

きたべりりかい？

さっぱり聞いたことのない単語ばかりで、ああ、頭が痛くなってきた。

これは夢？ それとも川の向こうってこんな世界になってんのかしら。

ほら、渡ったら最後この世に戻って来れないって言うあの川よ。

前世の行いによって三通りの流れがあるから、あんな名前になる川よ。

ここ海みたいだけどね？

「ね、小人さん」

うん？

少年、私の名前は小人さんじゃないんだよ？

まあ自己紹介してないもんね、しょうがないなあ。

「マリス、私の名前、瑠璃っていうの。　る・り」

そう呼んでねって言うと、マリスは首をかしげて発音した。

「リュイ？」

・・・残念。

「る・り」

「リュ・イ」

「瑠璃！」

「リュイ！」

・・・はあ。仕方ないな、諦めよう。

マリスは西洋系の顔立ちだし、きっと東洋の発音が苦手なんだ！

発音に関しては諦めることにしたところで、マリスが金の髪と水色の瞳をキラキラさせて訊いてきた。

「リユイは、どうしてちっちゃいの？」

それが分かれば混乱なんてしないんだよ、マリス。

冷静になるんだ（後書き）

天使ポジションをゲットしたマリス少年。

尋問（前書き）

アルシファーのターン

残酷かも。

尋問

黒い髪、黒に近い濃茶の瞳。

そろそろとまぶたを上げて俺を見た、妖精のような娘。

マリスによれば、あの娘は『リユイ』と言っらしい。

「あの娘をどこから連れてきた」

船内の倉庫に押し込めた海賊船の男たちを、とりあえず一人ずつ絞り上げてみた。

しかし口を割る者はいないようだ。

もしくは本当に誰も知らないか。

「・・・・・・・・・・」

だが、こいつなら知っているだろう。

悪名高い『モッソスの悪魔』を束ねてきた、この男ならば。

「……吐いたほうがいいぜ？ 何の情報も流さずにこのまま軍に渡せば、お前は確実に絞首刑だ。まあたいした情報じゃなくてもそっちだな」

盗賊の類はその罪状に関係なく絞首刑と決まっている。

ライズの脅しは、脅しではないのだ。

『モッソスの悪魔』の船長は黄ばんだ目を血走らせて、口の端をあげた。

「ルナ・メールも随分乱暴じゃねえか。『月の女神の加護』なんてお前たちを崇めてる奴らに教えてやりたいもんだ」

「……口の滑りがいいようだ」

幸い引渡しまでまだ時間があるからな。

傷付けずに口を割らせる方法など、いくらでもあるものだ。

「せんちょー」

倉庫から出てきたところをマリスに捕まってしまった。

その手に預けた小さな娘は見当たらず。

「あの子はどうした？」

「寝ちゃったよ、多分」

そうか、といいつつ、ほっとしている自分がいた。

何故かは分からないが。

「ライズは？」

今日は星の見方を教えてもらうんだ。

そう言っではしゃぐマリス。

「あいつはまだ仕事が残ってる。マリス、お前にしばらくあの子の世話を頼むから、ちゃんとやれよ」

「いえっさー！」

元氣良く戻っていくマリスの背を見つめながら、今宵も女神に祈る。

明日も、仕事がかどりますようにと。

尋問（後書き）

あれあれ？

な、なんかアルシファーが黒いよ。

夢見のまえに

眠る前に考えを廻らせる。

これは私の、ずっと続いていた習慣だった。

私はあの後、マリスと何を話したっけ。

ああ、そうだ。

この世界に魔法があることだ。

からくりじみた機械は多数あれども、科学と言つものは皆無と言つていいらしい。

だから、マリスは私の姿を見てああ言ったのだ。

「悪い魔法使いのイタズラ……」

誰もいない部屋にこだまする自分の声は、思ったよりも小さくて、

涙が出そうになる。

泣くな。泣いちゃダメだよ、瑠璃。

命があるだけましと思わなきゃいけないよ。

あの事故で死んでいった人たちの為にも。

友は、家族はどうなったのだろう。

私よりも早く、救命ボートに乗ったはずだけど、助かったのだろうか。

今となっては、知る術など無いのだけど。

「がんばろー……」

ここがどこだか分らない。

知っているのは、聞いたこともない国と港と海の名前。

そして、何より嫌いな船にまた乗ってるということだけ。

死んでいるのか生きているのか分からない。

死んだほうが良いのか生きたほうが良いのか分からない。

けれど、私は今ここにある。

小さくても大きくても、生きてても死んでも。

そして、ここがどこであつても。

私はここにいるんだ。

ふうつと大きく息を吐き、マリスが用意してくれた布切れ、いや毛布を体に巻きつけた。

夢見のまえに（後書き）

やや、ナーバス。

こんなはずじゃなかった。

要するに

我思う、ゆえに我あり。

デカルトさんだっけ？ この名言を私に託してくださったのは。

この言葉が無ければ、私はとくに崩壊していただろう、文字通り。

「とりあえず、地図見たいです」

朝起きて、ぼうっとしてて、マリスがやってきて、その後ろに昨日見たような気がするお兄さん二人がいて。

私は朝の挨拶も忘れて頼んでしまった。

この無礼者。

ライズ、と言う青い髪（染めてんのかな）に赤い眼と言う極彩色の青年が、笑いながら見せてくれた地図に、私は乗った。

とりあえず歩き回って調べるしかなかった。

ああもう、ちっちゃいんだから、しょうがないの！

踏んじやった国、ごめんね！

「どう？ 妖精さん」

ああ、このライズって男。

人をおちよくりまわして楽しむタイプだわ、絶対。

「どつって言われても」

「地図見たこと無かったかな？」

子ども扱いすんな！

これでも一応高校卒業はしてんのよ？

あ、ここじゃ通用しない気がする。

こうなったら地図に集中してやるんだから。

・・・・・・うん？

んん？ あれれっ？！

「どうした」

ライズじゃないほうの人が、声を掛けてくれたのに、私には答える
余裕すらない。

だって、この地図。

「世界、地図」

子供の頃から目にしていた、地球の地図と一緒にじゃないか！

国とか街とか海の名前がわかなかったのは、きっと発音の違いだよ！

これなら帰れる！ 体ちっちゃいのは気にしない！！

「これ、この地図私知ってるの！」

「っ！ 家がどこ分かるか」

「うん！ 実家はね、日本の」

私の今の指は小さすぎるから、地図上を歩いて行って、場所を示そうと思った。

ヨーロッパを抜け、中央アジアに差し掛かり、中国と朝鮮半島のその先。

地図には、『北ベリリ海』としか表記されていなかった。

来ちゃったね

異常な状況（周囲の服装、自分の状態など）。

知らない地図（確認したところ日本以外の形は一緒だけど国境と国名が違う）。

はい。言われなくても自覚しましたとも。

ここって、要するに異世界なんでしょう？

向こうにいる間読み漁った典型的な設定でございますね！

「あああ2次元」

泣いてもいいですか？ 暴れてもいいですか？

温厚な日本人の必殺技ちゃぶ台返しとかやつちゃってもいいですか？

後ろの方で（上で）「なんだにじげんとは」「おい、ちゃんと飯与えたんだろうな？」「あげましたー」とか言ってるけど。

てゆうか、これってトリップなの！？ 転生なの！？

誰か話し通じないかヘルプミー！！

・・・結局自分でトリップという位置づけに入れてみました。

だって転生なんて怖いじゃない。

転生ってことは、私一度死んじやったってことでしょ？

それにこの姿になるまでに、この世界で何らかの経緯があったことになってしまう訳で。

そんなの、はつきり言って怖いもの。

トリップだったら。

きつと後遺症か何かで体が縮んだとか、この世界に入るための必要
的要素で縮んだとか思えるもの。

でも・・・転生だったら。

私はこの世界で生まれて、昨日までどこかで生きてきて。

彼らの言うとおりならば、私はエルフ（小さい妖精）ではないらしいので、何らかの魔法で小さくされた人間ということになってしま
う。

いやだ。

「おい……リュイ」

この呼び名も定着してしまった。

発音、やっぱり難しいみたい。

この声は人をおちよくる極彩色の人じゃないほうだ。

夜空みたいな藍色の髪に、お月様色の瞳。

極彩色の人が南国の甘ったるい香りを放つ美しい花だとしたら、この人は夜空のように密やかで温かみのある誠実な美形、と言えるだろうか。

対照的な二人の青年。

普通ならば、人はより鮮明に極彩色を記憶に残すのだろうけど。

私はこの人を一番に覚えた。

箱を開けられて、初めて目にした人だから。

来ちゃったね（後書き）

人間にもきつと刷り込み的ななにかがあるはず

乗船許可

「リュイ」

・・・声に色気あるんだからそんな風に呼ばないで頂きたいんです。

「何・・・じゃない。なんですか？　せんちよー」

マリスが確かこの人をこう呼んでいた気がする。

せんちよー、つまり船長なのだろう。

若いのに、偉いねー。

「お前は船員じゃない。アルシファーでいい」

ああ、私は船に乗ってきたお客さんだから、船長ではなく本名で呼べと。

「あるしふあーさん」

「・・・・・・・・」

呼んでみた、けど自分でも変な感じだな。

ほら、学校に来た僕の母国語英語ですな先生の名前呼ぶときに感じる、あれです。

ちゃんと発音できないみたい。

それはあるしふぁーさんにも、それからライズさんとマリス君にも伝わったようで。

皆さん、早々に諦めましたとも！

「それで、だ。リュイ」

真面目に見つめないで！ 日本人にはその眼差し耐えられませんから！

「家の場所が分かるなら、送ってやっても良かったんだが、わからないのだろう？」

先程までの行動でそれはバレバレである。

今更取り繕ってもしょうがないことぐらい、分かってる。

でも、でもね。

「どうしてそうなったかも、覚えてないのだろう」

「……うん」

この人達に、トリップ説明したら理解してもらえるかな。

「ライズや他の船員とも話してみたが、お前はしばらくこの船で過ごすといい」

この親切な人達にずっと話さないわけじゃない。

ただ、時間が欲しい。

「……置いて貰えるの？」

「ああ。ルナ・メールはお前を歓迎する」

本当のことを話しても、化け物扱いとか海に落としたりとかされない時間が欲しいの。

セーラー服ですけど、何か？（前書き）

あほなサブタイトルごめんなさい

お気に入り登録ありがとうございます！

何か増えて嬉しかったですー

セーラー服ですけど、何か？

と言うわけで。

私はしばらくこの「ルナ・メール号」でお世話になることになったのでした。

でもまあ、働かざるもの喰うべからずなわけでした。

「仕事？」

「うん。何かない？」

本当は仕事をおねだりするなんてやり方も気に食わないのですが、こちらのことが何一つ分からないので仕方ないですよ。

ああアルシファーさん達には、私は悪い魔法使いに呪いを掛けられた上シヨックで記憶を失った可哀相な女の子って思われてるらしく。

「ゆっくり休んでいってたはずだ」

「……………こついうお返事が返ってきちゃうわけです。」

「でもダメだから」

「でもない」

「まままそこをおひとつ何とか」

「……おかしい言い回しをするもんじゃない」

と言う会話になって、ライズ（こいつは呼び捨てでいいと判断した）が腹を抱えて笑い、周りが生温かい目でこちらを見守るという図式ができている。

ちなみにね、私はお話するときアルシファアの肩に乗ります。

怖いんだよ！ 断崖絶壁の崖なんだよ！

「マリスと一緒にじゃないのか？ リュイ」

あ、話そらした。

「マリスにはかくれんぼしようって言ったの」

「で、撒いてきたのか」

「えへえへ」

「……………」

大丈夫だよ？ マリスもマリスで、私が何を目的に言い出したか理解してくれてるし！

ぽやつとしてる割に、賢いのだよ、あの子は。

「お願い。あるしふぁー」

「・・・・・・・・・・っ」

えへへー。これは勝ったかな？

アルシファーにこの台詞を言ってご覧と言ったのは、まあそこでのた打ち回ってるもう美形に見えない人ですけどね。

効果はあります。ほんとにあります。

何でかよく分からないけどねー？

しばらく懇願の瞳で見つめているとやっぱり折れてくれた。

「・・・・・・・・働くならそれなりの格好をしろ」

「それなりの？」

ちなみに今私が着ているのは、まあ着っぱなしのワンピースでして、汚いけど替えが無いのだ、しょうがない。

今の私のサイズだと、服とかは大きな町の人形師に頼むしかないんだって。

いえいえそこまでしてもらつ気はありませんよ！

これでも家庭科は小学校からずっと5でしたから、自信があります！

「じゃあこんなのでいい？」

「・・・・・・何だそれは」

何だって、そりゃー決まってるでしょう。

船員と言えば、これしかないでしょう？

「セーラー服」

ちゃんとパンツスタイルだからいいでしょ？

セーラー服ですけど、何か？（後書き）

セーラー服はもとも水軍の服・・・だったはず

アルシファアのメール

このセーラー服どうしたのだった？

そりゃ私が作ったに決まってる！　と言いたいところだけど違うんです。

だって今の私じゃ、針も糸も大きすぎて扱えないもん。

「どうした？　それは」

「んっと、枕元においてあった」

「・・・・・・・・・・」

そうです。

私は最初入っていた箱をベッドにして、マリスが頑張って作ってくれたふかふかクッションとかを駆使して眠っているんです。

で、朝起きたらベッドの傍にこのセーラー服が置いてあったんです。

誰が置いてくれたんだろ？　お礼が言いたいのにな。

「という訳で、作業着もあるからばっちり！ お仕事下さい！」

「 ライズ。調べる」

「あ」

「はいはい」と

セーラー服はあっさり奪われ、いまやライズの手の中にすっぽりと納まっている。

な、なんで？

「あるしふぁー、あの……」

「調べるだけだ。すぐに返せると思うが……」

アルシファーは難しい顔をした。

嫌な予感がするっていう顔つきに、こっちまで不安になってしまっ

「服、どうするの？」

訳がわからない。ちゃんとした説明を求めます！

「・・・すまない。この船に入った物は一度メールでないか調べる決まりがあるんだ。メールで無ければすぐに返すから、待っていてくれ」

「めいる？」

って、何？

不思議に思えば、そう思う私をみんなが驚愕の眼差しで見てくる。

「メールを知らないのか！？」

ええっ、もしかしてまずい？ 何かまずいこと言っちゃった！？

やはり一番最初に驚きを落ち着かせたのはアルシファーだ。

「・・・記憶が無いんだな、メールに関しても」

「う、うん・・・」

真摯な眼差しで私を見守ってくれるアルシファーに嘘をつくのは、心苦しい。

アルシファーは首にかけていたものを外すと、肩の上で座る私に見せた。

「これがメール・・・『加護』と呼ばれる」

それは綺麗な石だった。

深い深い『瑠璃色』の、瞳ほどの大きさの硝子球。

「メールはそれぞれ力を持つ。・・・二神と自然神の話は分かるか？」

首を振るとアルシファーは目を伏せがちにして、「分かった」とだけ言った。

いえ、全然分からないですけど。

「みんな作業に戻ってくれ。ライズは俺と一緒に。マリスを見つけたらリュイは俺が預かっていると伝える」

はいと言って作業に戻っていく皆さん。

あ、邪魔しちゃってた？

「行くぞ。 こっちに来い」

「はい」

差し出された掌の上に乗れば、アルシファーは動き出した。

アルシファアのメール（後書き）

ああ、やっと本題に。

発覚

「もう隠さなくていい」

部屋に入るなり告げられたアルシファーの一言に、血液がざあっと音を立てて下がった。

そつとテーブル（のような物）に降ろされ、溜息を吐かれた。

勿論溜息をついたのがアルシファーで、ライズはにやにやとまでは行かないが、含みのある笑みでこちらを見ている。

「記憶、あるのだろう」

うっ。

「だが、……普通の記憶ではないな」

うつうつ。

「本当の家はどこなのだ」

うつうつうつ。

「リュイ」

「……ごめんなさい……」

「泣かなくていい。お前に危害は加えないと約束する……だから、本当のことを話せ」

はい。話します。

「えっとね、私、違う世界から来たの。元の世界では船に乗ってて、アメリカに行く予定だったんだけど沈没して」

「待て、リュイ、お前」

「わかんないの、どうしてここにいいのか」

「リュイ」

「あるしふぁー、お願いだから、海に捨てないで・・・」

「・・・リュイ」

そつと頭を撫でていくアルシファーの戸惑った指に、すがり付いてしまった。

女の涙は、卑怯の証。

でも止まらない。

「うそ、ついててごめんね」

「ああ、」

泣く私と、それを見守るアルシファ―。

そしてライズがもうふざけてない表情でいたことには、気づかなかった。

神話とメール（前書き）

視点の変化に要注意

神話とメール

リュイの、涙ながらに話す内容をまとめるところだ。

彼女はここではない、別の「セカイ」から来たという事。

その「セカイ」はある一点を除いて、この「セカイ」と全くと言っていいほど同じ形をしている。

その一点とは彼女の故郷。

「ニホン」というその国は、我々側の地図からすると北ベリリ海上に位置するらしい。

信じがたい話だが、彼女の無知さやすらすらと出てくる言葉、嘘についていないと見える瞳からは、彼女を疑うことはできない。

リュイは何度も謝っていた。
嘘について申し訳ないと。

俺は慰めたいと手を伸ばしたが、途中で唇をかみ、手を握り締めた。

俺が気持ちを込めて彼女に触れれば、その小さな体はばらばらになるだろう。

そつと扱っていれば、リュイはやがて涙を拭き、いまだ膜を張った瞳で俺を見上げた。

「それで、メイルって何なの？」

そう言えば、教えるのを忘れていた。

メイルとは、リュイの言葉を借りればこの「セカイ」の者達が信じる神々の加護だ。

神々は全てで六神。

昼と太陽を司る『サナ』。

夜と月を司る『ルナ』。

火と永遠の愛を司る『スクナ』。

水と名誉を司る『イリナ』。

風と才を司る『ピコナ』。

土と再生を司る『ゲンナ』。

『サナ』と『ルナ』は尊き二柱の神であり、女神であると伝わっている。

残りの神々は男である、とも。

「じゃあルナ・メイルって言うのは」

「月の女神の加護、だ」

「船の名前だよね？ でもさっきの石もメールって言ってたよね？」

「……メールには、もう一つ意味がある」

それは、言葉通りに、『加護』だ。

そう言うとりユイは分からない、と言ったふうに首を傾げてこちらを見た。

死ぬかと思った。

神話とメール（後書き）

神話、めんどくさいなんて言いませんけど？

破壊光線（前書き）

お気に入りが増えて嬉しいです
ありがとうございますー

破壊光線

「・・・・・・・・っ！」

「!？」

なんだどうした。

いきなりよるめいたアルシファーに疑惑の目を向けざるを得ない。病気が何かだったら困るし、ライズなら分かるだろうか。

そう思いライズにアイコンタクトをはかるがこいつもこいつだった。掌で顔面、特に眼の辺りを覆っている。体も微妙に震えてる気がする。

そんなに直視したくないものでもあったのだろうか。

「あるしふぁー？ 大丈夫・・・？」

とりあえず心配はライズよりアルシファーだ。ライズはほっといったって死なない気がするし。

「
ああ」

済まなかった、と言いつつ顔が妙に赤いのが気になる。
熱でもあるのかな？ 風邪ひいてるのかな？

心配で訊いてみると、アルシファーが答えに窮する中ライズがひよっこり顔を出してきた。

目が真面目すぎて怖い。口許も引きつってるし。

「最初に訊いておくけど、年いくつ」

最初って、そんなのもっと早く訊いておくものじゃ？
と思ったけど深く突っ込まないことにしよう。

「この間十八になったけど」

ひくりと二人揃って口許を引き攣らせた。

「そ……じゃあ伴侶の一人くらいいるよね？」

伴侶って、旦那さん？ つまり、夫のことだね。
一人くらいって、二人以上だと色々問題あるんじゃないですか？

「いるわけ無いよ、まだ十八で」

第一高校を卒業したばかりで結婚なんて、滅多にあることじゃない。ああ、こっちじゃ適齢期がずれてるのかな。

日本だつてもつと昔は十四・五で結婚するのも珍しくなかったんだし。

でもなんでいきなりそんな話題になるの？

こっちの人ってこんな会話の方法しかないのかな？

それって話題から話題へと繋げる日本人の会話方法とは合わないかも。

ま、何とかなると思うけど。

「じゃあ婚約者は？ 恋人は？」

キラキラさせるな、目を。

「いない」

・・・これってもしかしくなくても嫌味ですか？

悪かったですねえ、恋愛偏差値ゼロの上、彼氏いない暦〓生存年数で！

友達にも散々からかわれましたよ！

自分で言うのがどれだけ悲しいか、女の子より綺麗な顔した貴方たちには一生解らないでしょうよ！

「リュイ」

二人が真剣な眼差しでこっちを見てる。見るのはいいけど直視は止めなさい。

「絶対他の奴等には十八って言わないで。約束して」

・・・・・・はい？

さば読めと。そう仰るんですか。

「十三、いや十二くらいでいいかな」

あのう、通用しないと思いますよ？
そりゃ異世界トリップにありがちな「日本人は童顔」設定はばっちり嵌ってますが。

「お願いだ、・・・・・・リュイ」

うつうつ。

ライズはともかく、アルシファーにそんなお願いされたら、堪らない。
いでよ、ぐすん。

「わ、わかった」

「破ったらお仕置きだからね？」

にこりと笑い、顔を絶妙な角度で傾けるライズ。

いつか貴方は詐欺で捕まると思うんです。

破壊光線（後書き）

キーワードに逆はー加えるべきかしら

本題に入りたい（前書き）

お気に入りが100人になったら番外編でも書きましょっか。

本題に入りたい

ま、まあ私の恋愛経験も年齢も今はどうでもいいよね。
そう言うとアルシファーは目を伏せて、ライズは舌打ちした。
ガラ悪いなー、ライズ。

「ね、メールって違う意味もあるの？」

「ん・・・ああ、そうだな。具体的には」

こうだ、と言って差し出されたアルシファーのメールを注視する。

煌めいた瑠璃色の奥から黒い靄が現れ、ってえええ！？
真っ暗な世界、頭上に瞬く星々。

「よ、夜」

「そうだ」

黒い靄が広がった部屋はそこだけが夜のようになった。
否、これはもう夜だ。

星が瞬き、室内のはずなのに吹く風は体温を知らぬ間に下げた。

「なんで？ どうしてこうなるの？？」

「このメールは『ルナ』の気を帯びているからな・・・このぐらいしかできないと言ったほうが正しいが」

何ですと！？

一部屋とはいえ昼間を夜に変えるのを大した事無いなんて私は思えない。

ん？

ちよつと待って、『ルナの気を帯びている』？

「ルナって、神様だよね」

「そうだが」

「帯びてるっことは、神様が実際にいるとか？」

「いないものを信ずるわけが無いだろう」

何言ってるのこの子。とうとう頭弱くなったかみたいな目で見ないでアルシファー。ライズお前もだ。

「じゃあさっき言ってた神様たちって、もしかしてみんないるの？」

「無論だ」

あーここに来て異世界とのギャップをひしひしと感じる。

でもこれは日本人特有のものか、な。

神様本気で信じてる人たち、ごめんなさい。

ついでに異世界の方々ごめんなさい。

「じゃ、じゃあその神様の力を分けてもらった石がメールなのね？」

あれ、じゃあセーラー服はどうなるんだろ。

「いや、神の気、神の力を帯びたものが石とは限らない。確率的には最も高いがな」

あのセーラー服が神様の力持ったら怖いんですけど。

「ふうん……メールかどうか調べなくちゃいけない理由は？」

「俺達はメール、特にルナを求めて旅をしているからだ」

おお、宝探し！

「メールはそれ単一でもそこいらの魔道師三人分にはなるほどの力を持っているが、俺達は違う目的で集めている」

ん、この流れはまさかの……。

「同じ神のメールを全て集めれば、神を呼び出し、一つだけ願いを叶えて貰えるんだ」

……ドラ ンボールでしたか。

本題に入りたい（後書き）

話の矛盾など発見した方、こっそり教えて下さい。

襲撃

ちゃーらっらっちゃちゃ、ちゃらららっらちゃちゃ。

ああ、流れてくるよ、あの伝説のテーマソングが。
集めて願いを叶えて貰うのね、はいよく分かりました。

「いくつ集めればいいの？」

ドラ ンボールは七つだけだね。

「ルナならば十三、サナは五、他は良く覚えていないが、いずれも十個以下だったはずだ」

何でルナだけそんなに多いんだろ。不公平じゃないの？

「ルナは慈愛に溢れた女神らしいが、同時に気まぐれだ。それぞれの神よって数は違うが……」

「が？」

「全て集めた者はいない」

「……あの、その笑顔やめて欲しいな。」

私の中ではアルシファーさんはストイックキャラでしてね？

その、何と言うかその野生の獣がするような嬉々とした表情は止めていただきたい、のです。

だから。

「頑張ってください」

私はそれしか言えないんです。はあ、関わりたくないと言えば早いんでしょうか。

助けてもらって義理も恩も満載ですが、はっきり言って面倒事は嫌いです。

それに、私が力になれるような事なんて無いでしょう、ね？

「……そうだな」

だから含み笑いは止めなさいっ！

嫌な予感で鳥肌たっちゃうでしょうが！

何か違うことに集中しよう。それが精神的にきつと一番いいに決まってる。

「……あれ？　なんか外、騒がしくない？」

「せんちょー！」

ばたばたと音がしたと思ったらマリスが扉の前まで来てるらしい。さつと立ったアルシファーが扉に駆け寄り勢い良く開けると、そこには真っ青な顔をしたマリスが立っていた。

「どうした？」

「モツソスの悪魔の本船が……っ」

「何だと!？」

いきなり慌しくなりだした周囲についていけず驚いていると、ライズとアルシファーが急いで部屋を出て行った。

去り際にポイッとマリスを中に放り込み、鍵を閉めて。何が起こってるんだろ。

「マリス、何かあったの？」

「えっと……」

お姉さんに正直に話さない！

と言う気持ちを込めてじっと見つめていると、マリスは簡単に折れた。

「昨日捕まえたモツソスの悪魔……海賊の本船が近づいて来てるんだ」

「本船？」

「昨日のは船長が乗ってはいたけど、高級品を運ぶ小さな商船狙いの船だったんだ。本船じゃないとは思っていたから、せんちょーもライズさんも早めに海軍に届け出ようと思っていたんだけど……」

「

こんなことになるなんて、と少し膜を張った目が不安げに揺れている。

つまり、本隊から分かれてた襲撃部隊を捕まえたから、本隊に感づかれてこっちが襲われる前に、さっさと突き出そうと思っていた矢先に襲われちゃったと。

しかも慌てぶりからして、やばそうな感じ。

……私のせいで、タイムロスがおきたんだろうか。

ううん、そんなこと考えるのは後だ。

でも剣も何も扱えない私は、外に出たっていい迷惑だ。

だからアルシファー達もマリスを残して行ったんだろう。

落착け、私。

けれど、落ち着いても居られない状況になってしまったら、どうしよう。

・・・気のせいかな。ドアノブが凄くガチャガチャされてる。

「・・・マリス、ここの鍵って頑丈？ ついでに扉も」

「・・・こないだ料理長が壊したばかりだよ」

何をやってるんだい、料理長！

バキッという音がした。

汗がたらりと背中を流れた。

・・・これって、ピンチじゃない？

装、着。(前書き)

多少暴力シーンあります。
喧嘩程度だけど。

装、着。

あああまずい、これはまずい！

このまま踏み込まれてばっさばっさと斬られたりしたら、し、死んじやうよね。

マリスだって殺されてしまう。

何とかしなくてはならない、その一心で辺りを見回した。
が、武器になるようなものなんてあるはずが無い。

しかし、あれがあつた。

これだ、もうこれしか頼るものは無い。

当たって砕けちゃダメだけど神様仏様こっちの世界の神様、どうか力を貸して下さい！

二度といい加減な信仰なんてしませんからっ！

駆けつけた頃、モッソスの悪魔の本船との距離は油断ならないものだった。

このまま横付けされて乗り込まれれば、こちらの勝機が見出せなく

なる。

奴らの乗船だけは、防がねばならない。

「何をやっている！ 全員配置につけ！ 絶対に乗り込ませるな！
！」

しかし既に横付けに近い状態では努力も空しく、奴らはルナ・メイ
ルに乗り込んできた。

「叩き落とせっ」

怒号と金属の触れ合う音の中、甲高い悲鳴が響き渡る。

そちらを見ればリュイとマリスのいる部屋に数人の男達がなだれ込
んで行く所だった。

まずい！

「リュイ！ マリス！」

駆けつけようにも前方は塞がれ、多勢に無勢である。

前日の傷も癒えないうちからの本格的な戦闘は、圧倒的にこちらを
不利な状態に追い込んだ。

「クソっ……！」

マリスの泣き声とも叫び声ともつかぬ声に目をやれば、部屋から出てきた男の手に何かが握られている。

黒い髪。妖精のように小さな体。

「リュイ!!」

ぐったりとした姿は正に人形のようなだった。

「リュイ! リュっ……………」

「うるせえガキだな、黙ってなっ」

部屋に押し入り私を目にするなりわしづかんだ男は、その足でマリスを蹴飛ばした。
壁に勢い良く飛んでったマリスは、そこで気を失った。

「な、何すんのよマリスに! 大の大人が子供に暴力ふるって許されると思ってるの!？」

「へ、お人形さんは黙りな!」

「きゃ あああ!」

ぎゅっと握り締められ、体中の骨がきしんだ。

こ、こんにやろう!!

日本人伝統の丑の刻参りでもお見舞いしてやろうか！

と思いつつも反撃できない体が恨めしい。

ずっと握られてるから、圧迫されて凄く苦しいし。

やばい、何がやばいって、意識がヤバイ……。

「リユイ!!」

その声にはっとした。

アルシファーが、こっちを見てる。

あ、ほら危ない、ダメだよ、よそ見たら。

私なら、きっと大丈夫な、はず。

成功するかどうかわかんないけど、お祈りいっぱいしたからきっと大丈夫。

それに力の流れみたいなものは、さっきアルシファーがメールを見せてくれたおかげで、感じ取れた気がするし。

どうか、このセーラー服が、メールでありますように。

日本人の怨み方は怖いんだからね！ 覚えてなさいよ！？

問題発生（前書き）

お気に入りが百件超えたので番外編書きます。

皆様に感謝、感謝です。この程度で喜ぶなとか言わないで下さいね。

あ、視点にご注意下さい。

あ、15禁かもです、注意して下さい。

問題発生

リュイの様子がおかしいことに気づいたのは俺だけのようだ。

船場で戦い続ける船員は勿論、彼女を薄汚い手で握っている男もだ。一体何をしようとしているのか、その答えは分かりそうで分かりたくない。

それを行った場合、下手をすればリュイの精神が崩壊してしまうからだ。

当たって欲しくない予想に、歯軋りをし、何もできない自分に苛立った。

アルシファーがメールを使ったときの光景は今も目に焼きついている。

金と紫の糸が絡まりながら彼から溢れ出て、メールである石に吸い込まれていった。

あんな綺麗なものは、きっと他に無い。

あれをやるうとするけれど、うまく糸が伸びない。出てはいるけど、アルシファーのは綺麗な配色だったのに、私のはただ白いだけだ。

・・・・色って人それぞれなのかな。

奮闘している間も、毛むくじらのごつい手に私はいまだ握られ、そのまま男は歩みを止めようとしなない。

ぴゅーっと、誰かが口笛を吹いた。

「綺麗なお人形じゃねえか」

「それがどっこい、これ生きてるんだぜ！」

「人形が息してるってか、頭でも殴られたか」

誰が人形だ誰が。

確かにサイズは今現在進行形で規格外ですけどね。

私はれっきとした人間なんだからね！

・・・いや、こんな事に怒ってる場合じゃないんだ。

私が今メールを頑張って使わないと、傷つくべきじゃない人たちが傷ついてしまう。

こんなに集中するのは高校受験以来だよ、もう！

「へえ、羽がねえからエルフじゃねえしな。裏市に出しゃあ相当の値が付くぜ」

「あっ」

集中してる間に私は違う男に渡され、体のあちこちをぐりぐり指で押された。

指が鳩尾に入ったときは、流石にぐえっとなった。

「面白いねえ」

「・・・っ、放してよ、馬鹿！」

どこが面白いんだこの変態！

服と肌の間に入ってくる指を急いで押し退けると、獰猛な肉食獣の

瞳が私を面白そうに見下ろした。

「誰の玩具かねえ・・・初心そうに見えるのは躰けられてんのかい？」

ななななな何言っただコイツっ！

やばい、やばいよ目がイっちゃってるって!!

あああんたの仲間も遠巻きに見てるし、ちょっと誰か收拾付けなさい！

このやばい男をどうにかしなさい！

「んー？」

顔近づけないでって言うてるでしょ、全くどいつもこいつもっ。

「おやおや、面白い物を着ているねえ」

へい？

男の瞳に違う光が走ったのを、私は見逃さなかった。

やばさレベルアップ。不審者は『嘗め回すように見る』をおぼえた。
・・・こんなことやってる場合じゃない。うん。

「目覚めていないメールか、これは面白いねえ」

「……………何が？」

「気が強いところも可愛いよ」

「……………だから、何が？」

話を通じないって辛いなー。

それにコイツ誰かとちよっと同じ匂いがする。
誰だっけ。うーん。

「デュファンス様、ルナ・メール号船長以下捕縛いたしました」

「あつそ。こっちの船長たちはどこに居た？」

「倉庫に閉じこめられておりましたところを先程お助けいたしました」
た」

「……………そう、生きてるか。じゃあ残念だけど処刑は家に帰ってからだねえ」

「で、では本船の倉庫に詰めておきます」

「そうしてくれる？」

じゃあね、と私をにぎにぎしながら大きな船に戻っていく変態。

ちよっと待って、さっき伝えに来た奴、ルナ・メール号船長以下捕

縛って言ってなかった？

．．．．．嘘でしょ？ アルシファー．．．．．。

問題発生（後書き）

何故変態が生まれたのかしら。

デュファンスの目（前書き）

家庭の事情でやや更新が遅れてしまいました。
申し訳ありませんー

ああ、変態のターンか。

15 禁超えてると思ったら教えて下さい。

こいつが出てくると色々引つかかるような気がするんです。

デュファンスの目

紅潮する頬。

喘ぎ声。

汗ばむすらりと伸びた肢体。

そんな女たちを前にしても速まることの無い心臓が、今僕の中で暴れている。

「ちょ、やめてってばっ、変態！」

変態か。ふふ、誰もそんなこと僕に向けて言ったこと無いなあ。

「あんまりうるさいとこの手を握り締めてしまうよ」

「やればいいわよ！ 変態変態変態！」

この可愛い黒髪の人形が僕のことを変態と言う度、胸が高鳴るのは何故だろうか。

わずかな花の香りと潮の香りが混じるこの髪に口付けたい。

お人形を左手で握り締めたまま本船に戻ると、みんなが異様な目でこちらを見ていた。

そんなに羨ましそうに見るんじゃない。その目を割り貫くよ？

「さて、そろそろ吐いてもらおうか？ 君は誰のお人形なの？」

「知らないっ。はーなーしーてー」

ふふ、強情な所がまた良い。

君は、僕の征服欲を存分に満たしてくれるだろう。

「強情が許されるのはベッドの上だけだ。さあ、痛い思いはしたくないだろ？」

「ぎゃ ！？ 何言ってるの！？」

「それとも口を割らないのはそういうこと……？」

「割る！ 何でも割る！」

可愛いな、その涙目とか泣きそうな声とか世界の終わりみたいな叫び声。

口以外は後から割らせてもらおうか。

「で、誰に愛でられてるのかな？」

そいつは後から特別に僕が処刑してやろう。
突起という突起を切り落としてくれる。

「愛でられるなんて、昨日会ったばかりだもん」

「・・・・・・・・・・は？」

「昨日拾われたばかりなの！ 名前だってほとんど知らないし・・・」

「・・・・・・・・・・そのメールは？」

その斬新なデザインの服は間違いなくメールだ。

ルナではないから彼女に与えられたのだと思っていた。

サイズだってピッタリだし。

そう指が裾から入らないくらいサイズはピッタリなんだ。

腹が立つから後で引き裂いてやりたいな。

しかしメールは裏市場では最も高値で取引される。
残念だね。

「これ？ やっぱりメールだったんだ」

「で、誰に貰ったの？」

「朝起きたら枕元にあった」

「・・・・・・・・・・」

朝起きたら枕元にメールがありました。

なんて誰が信じる？

「それよりっ、あるしふぁー達は無事なの？ どうするの？」

あるしふぁー？ ああ、ルナ・メール号の船長がそんな名前だった
っけ。

あんな何を考えてるか解らない男がいいの？

「好きなの？ そいつ」

「違う。一宿一飯の恩」

つまり、拾ってもらい食事を貰い、寝床を与えられたことによる恩
と言いたいのか。

時々難しいことを君は喋るから、僕はとても苦勞するだろうね、こ
れから先。

「もちろん、処刑する」

「………やめてよ」

何でもするからと、か細い声を出すその喉に喰らいつきたい。
心臓が早すぎて胸が痛い。

「僕のものになるならね」

そしてあんなことやこんなこと、そんなことまでしてあげよう。

「これ？ あげてもいいけど」

違うよ、メールじゃない。

欲しいのはメールなんかじゃない。

欲しいのは、君。

僕だけの、漆黒の天使。

デュファンスの目（後書き）

暴走してしまった（汗）
でも載せちゃえ。

取引

アルシファアは縛られながら、霧散しかけた意識を必死に集めた。

モツソスの悪魔たちはある島を根城にしているようだ。

その島のどこかにある牢に、ルナ・メール号の者は繋がれていた。俺は溜息をついた。

リュイは、無事だろうか。

そう、最後見た光景では彼女は大柄な男の手の中に居たが。

もし売り物にされるならば、とりあえず傷を付けられるようなことにはならない。

しかし同じく意識を取り戻した船員の話に寄れば、本船を率いていたのはデュファンスらしい。

おまけに、その手にあの子を嬉々として握っていたそうだ。

顔は知らないが、俺たちメールを求める者の間では、最も相手にしたくない奴の一人と話に上らない日はない。

残酷な悪魔。

それが本当ならば、リュイにとっては売られるよりも酷だ。

「お前がアルシファアか」

ひんやりとした牢に流れる、ひんやりとした声。

「……そうだが」

直感で分かった。こいつがデュファンスだ、と。

猫のように細められた目は冷たい氷のような水色。

稀色である黒を髪色に持つ、噂に違わぬ悪魔だ。

コイツからは血の臭いがぶんぶんする。

知らぬ間に顔を歪めていたのだろう。デュファンスが乾いた笑いを漏らした。

「臭うかい？　そこで役立たず達を処刑してきたところでねえ」

役立たず……恐らく俺たちに負けた船長たちだろう。

「今はもう、僕がモツソスの悪魔の代表だよ……ルナ・メイルの船長、取引をしよう」

「取引だと？」

「そう、交換したいものがあるんだ。こちらが差し上げるのは、君たちの命」

代わりにね　と微笑む唇は血の色。

聞いた話が正しいならば、こいつが望むものは一つだ。

「・・・リュイ、か」

「」名答」

やはり、あの子は捕まってしまったのだ。

守れなかった事が、悔しくて情けなくて、歯噛みした。

きつと恐ろしい思いをしているのだろう。

しかし・・・今の俺に、あの子を助ける力は残っていない。

「君は優秀な船長だと聞いてねえ、ほら、あの小さい子にだよ」

「マリスに何をした？」

「別に？ 怪我が酷いから手当てをしてあげただけだよ」

ただ、経過は良好じゃなくってね。

そう告げるデュファンスは、こちらよりも圧倒的に有利なカードばかり持っている。

俺はこの取引が、取引でないことなど分かっていたが。

「言うなれば君たちは敵。ただしリュイを残すなら、命だけは助けてやるよ？」

たったひと月前に入っただけの少年だが、あの子ももう大事な仲間だ。

彼と、彼以外の大勢の仲間と、あの少女を天秤にかける。

聞いていた以上の、残虐さだ。

「……リユイを、傷付けないか」

ガラガラと音を立てて崩壊していく何かに、気づかない振りをした。

「勿論、大事にしよう」

「会わせろ」

「……いいよ、ほら」

「　　っ!？」

デュファンスのポケットから掴みだされた、黒髪の少女。
その目は苦しげに、俺を見ていた。

「……ある、しふぁー」

「残念だったねえ……？　彼は、君を捨てた」

ああ。

どうして!!

彼女の悲しそうな眼から、逃げ出したかった。

けれど視線を逸らすことは、俺の中の何かが最後まで許しはしなかった。

「船を用意してやる。メールも僕は興味ないからね、返してあげよう」

もう何も聞きたくなかった。何も見たくなかった。

リュイは泣くことも責めることもせず、そのままデュファンスに連れられて、俺の前から居なくなってしまった。

リュイ。

どんなに謝ってもそれは俺の自己満足になるだけだ。お前に許しは請わない。

「待っている……きつと、助ける」

必ず、迎えに来てみせる。

そのときお前が、再び俺の手を取ってくれることを願って。

取引（後書き）

何故シリアス。

取引 side 瑠璃（前書き）

お忘れかと思いますがヒロインの名は瑠璃です。

前話とその少し前の瑠璃視点。

変態出没注意。

取引 side 瑠璃

がっしょん。

体への拘束が弛んだと思った矢先にした音の発生源は、銀色の拘束具である。

ウエストやら腕やらにしっかりとがっちり嵌ってしまう物。
……特注ですか？ いつのまに。

「これ、なに？」

ウエストにピッタリです。ほんとにいつ測ったの。

「ふふふっ」

ああやっぱり結構です、答えなんて聞けなくってもいいです。
異世界にも変態っているんだね。いや、人間が居れば変態もいるか。

「君の望みどおり、ルナ・メールの奴らを助けてやってもいいよ？」

その代わり、と差し出されたのは鳥かごならぬ、虫かご。

「僕に愛でられる覚悟がある？」

「・・・その展開は何となく予想できたよ、うん。
安いアニメの悪役かこいつ。と思ったのは内緒だ。
どうせアニメなんて言っただけ通じるはず無いとは思っけどね、こ
の人怖いし。」

「メールじゃなくていいの？」

「君がいい」

ふーん。変態の趣味はよくわかんない。
けどアルシファー達が助かるならいいか。
あとでどうとでもなるでしょう。

「それに入ればいいのね」

「・・・」

「あ、体動かないんだこれ。そっちまで持ち上げてくれる？」

「いい、けど・・・」

持ち上げて私を虫かごに入れながら、変態はぶつぶつ言ってる。
何で抵抗しない、とか。

そんなにあいつらが大事なの？ とか。
もっと泣き喚いて懇願する姿が見たいのに、とか。

全部聞かなかったことにしてしまおう。そのほうが精神的には健康
そうだ。

変態は私を虫かごに入れて、とことこと歩く。

あのね、虫かごに入れてもそんなに大事そうに胸に抱いてちゃ、ダメじゃない？

私は楽でいいけど・・・。

着いた先は陰湿な牢獄。うげ、血の臭いとか気持ち悪い。

臭いにふらふらしていると変態がにんまりと微笑んだ。

もう何も言うまい。

そういう私自身に変態に対する耐性がつき始めていることは、あえて認めない。

「眠ってていいよ」

かこの目の隙間から入ってきた指にそつと撫でられる。

変態の指にピッタリサイズの隙間つてのも怖いな。

・・・撫で方があんまり上手だから、少しくとうとしてしまう。
撫でながらこつちを見る目は、ほんの少し優しいと思った。

うとうとし過ぎて眠ってしまったのだろう。気が付けばかごはどこかに置かれ、上から目隠しのように布が被せられていた。
ていうか、目隠しなんだろうけど。

向こうのほうから悲鳴とか形容しがたいものが色々聞こえてくるから、それは間違いない。

やがてそれが止むと、布は取り払われ、血の臭いを纏った変態が現れる。

変態は私を連れて、また別の場所へと向っていった。

とりあえずシャワーでも浴びて欲しいと思った。

取引 side 瑠璃（後書き）

区切りの良さそうなところで分けます。
次回瑠璃視点の続編です。

取引2 side 瑠璃（前書き）

大分更新ストップしてしまいまして、すみませんでしたー。

取引2 side 瑠璃

ゆっさゆっさと変態の歩みと同じリズムで揺れる籠に、どうやら酔ってしまったようだ。

うう、車酔いするほうじゃないんだけどなー。

そんな私を変態はかなり心配している。はっきり言って、具合の悪いときは静かにして欲しいよ？

「あああ籠になんて入れるんじゃないかった！　すぐに医師に見せてあげるから……」

変態は牢屋から引き返し、走っている。
ゆ、揺らさないで欲しいー。

やがてどこかの部屋に入ったかと思えば、薬品臭さが鼻を衝いた。
それと、聞き覚えばつちりなこの声は。

「ま、マリスー？」

「！　リュイ……」

包帯ぐるぐる巻きじゃ無くて安心したけど、何でここにいるんだろ
う。

「ああ、その小僧？ 怪我が酷かったし、まだガキだから医務室で面倒見させてるんだよ。それよりリュイ、どこが痛い、気持ち悪い、ああこんな時に医者がないなんて・・・っ」

やばい、このままじゃ多分無実の医者が殺されてしまう。

それにその心配の仕方はありがたさ通り越して、ちよつと気持ちわる・・・げほんごほん。

「私は大丈夫だよ・・・それより、さつきみたいに撫でて？ あれ気持ちいいから・・・」

「・・・・・・・・・・」

無言で撫で始めた変態の顔が真っ赤なのに気づいて、やってしまったと思った。

何で段々この変態の御し方を身に付けてるの、私。

猛獣使いは18歳のハローワークには載っておりません。断じて。

「リュイ・・・？ どうして・・・」

「マリス」

ぼろぼろと大粒の涙を流しながら、必死にそれを隠そうとするマリ

スに、胸が締め付けられた。
泣いていいのに。
痛かったら、もっと泣いてもいいのに。

「ごめ、ごめんなさい、僕っ……リュイを守れなかった……
！」

「え……？」

「僕、せんちょーから、リュイを守ってって、言われてたのに！」

ああ、そっか。

ごめんねマリス。お姉さんは勘違いをしてました。

痛くて泣いてるんじゃないんだね。
悔しくて、泣いてたんだね。

「マリスは、守ってくれたよ」

「リュイ、ひっ、う」

「私、マリスみたいに頼りがいのある男の子、初めて見たもん」

「リュイっ……」

「悔しいなら、もっと強くなって見せることだな、ガキが」

・・・そこで私を撫でながら物騒なことゆうの止めなさいよ。
大人気ないなー。

「で、クソガキ。お前は僕の天使の何なんだ？」

「・・・・・・・・・・はあ？」

うん、その気持ち、よく分かるよ。
もうどこから突っ込めばいいのやら、この変態は。

それから変態を退けつつ、マリスと何とか情報を交換した。
ここにいるのはマリス一人で、彼の傷はある程度治療師なる人が
治してくれたそうだ。
ほんとに異世界なんだね、治療師とは、恐れ入ったよ。
でも、彼には目立った後遺症も残らないようで、安心した。

「じゃあマリス、あるしふぁー達がここを出るときには一緒に行け
そうだね」

「え？」

「大丈夫、もう痛い思いはしないからね！」

お姉さんがここから無事に出してあげるから！
大船に乗ったつもりでいなさい！

「じゃーね、マリス」

「リュイ！？」

そのまま無理を言つて、今度はまた変態の手の中に戻ることにした。
変態もどうやらそれが一番良いらしく、にまにまして気持ち悪いけど仕方ない。

何かまだ言葉を発しようとするマリスを置いて、医務室らしき部屋を出たものの、変態は一向に進もうとしなかった。

「へ・・・じゃない、デュファンス、次はどこに行くの」

「また地下牢に行くよ」

「ふーん」

そろそろアルシファー達とお別れかあ。
ちよつと、寂しいかな。

それからしばらく変態は静かにしていたが、地下牢への扉の前で、

突然歩みを止めた。

「ここら、反動でぐえつとなるでしょうが。
慣性の法則、ちゃんと理解してます？」

「・・・やっぱり、皆殺しにしてやりたいなあ」

「そんなの約束と違うよ！」

ここまで来て破られてしまつのはかなり困る。そんなの許せない。

「何でっ・・・」

「何で？ 理由なんて決まつてる。・・・リュイを泣かせていいのは僕だけだ」

「・・・へ？」

「泣いてる、さつきから・・・ああ、殺しておけば良かった」

あんな約束するんじゃないかった。

そんな呟きは私の耳には入ることなく、どこかへ消えていった。

悲しい？

苦しい？

怖い？

．．．．．きつと、違う。

泣いてるなんて、自分が泣いてるなんて知らなかった。
それに、知りたくなかった。気づきたくなかった。

「．．．．．ああ、もう弱いな、私．．．．」

そっか。

私って、アルシファー達を頼ってたんだ。

失くしたものの全てに置き換えてたんだ。

勝手に、支えにしてたんだ。

．．．．．ごめんなさい。

アルシファー、ライズ、マリス．．．．。

弱くて、ごめんなさい。

さよなら（前書き）

これにて一部、またの名を異世界侵入編終了です。
すぐ二部始まりますが、区切りました。

さよなら

溢れる涙を拭って、ごしごしと目を擦った。

泣いてるところなんて、アルシファーたちには見せられない。

「ごめんなさい・・・もう行こう」

「・・・僕は、君が手に入るならそれでいいんだけど」

私を見ることも無く真剣な面持ちで言った変態に、思わずどきりとした。

この人こんな顔もできたんだ。

・・・ただの変態なんだと思ってたのに。

そう言えば、マリスも助けてくれたんだっけ。

あれ、意外とまともなのかな？

「あの一」

「何？」

「マリスのこと、お礼言うの忘れてたから。・・・ありがとう」

「言葉だけじゃ物足りないなあ」

「……」

「やっぱりお礼って言うのは、お礼される側の喜ぶことをするべきだと思うよ」

「……うん。前言撤回しよう、そうしよう。
この変態なら体で払えとか言いかねない。」

そしてアルシファーが繋がれている牢に近づいた頃、変態は私をポケットにそっと入れた。

だからアルシファーと変態が話してた内容なんて知らない。
でも、わかることもある。

ポケットから出された瞬間に見た、アルシファーのあの顔が、ずっと頭から離れない。

「……ある、しふぁー？」

「残念だったねえ？ 彼は、君を捨てた」

何でそんなに泣きそうな顔をしてるの。

そんなに悔やみきれないって、表情ができるの。

捨てたなんて思わなくていいんだよ？

アルシファール達は何も悪くないでしょう？

「違うなあ」

「え？」

薄暗い牢を離れて地上から、解放され船に乗り込んだルナ・メールのみんなを見上げていた。

そこでの変態の発言に、私は首を傾げた。

「男ってね、守られることを屈辱と思う時もあるんだよ」

それが？ と言いたげな私の視線に気づいたのかそうでないのか、変態はまだ見上げている。

強すぎる日差しのせいで、変態が何を見ているのかまでは分からなかったけど。

何となく、想像はつく。

ばいばい、ルナ・メールのみんな。

またいつか、会えるかな。

さよなら（後書き）

お気に入り登録してくださった方、感想を書いてくださった方、ありがとうございます！

続きまして二部、またの名を異世界順応編です。

むねぽけっと(前書き)

第二部異世界順応編始まりです。
しかしトップバッターに問題あり。

むねぼけっ

それはアルナディア皇国暦504年、リ・ルナの月9日のことだった。

夜明けと共に大地が咽び泣き、その大きな口を開けたのだ。つまり大地震である。

首都は壊滅し、その機能を失った上、人々が愛して止まない王宮の一部が崩落した。

しかし王族は無事であったことで人々はつかの間安堵した。だがやがて首都を、ひいては皇国を揺るがす事態が起こる。

崩落したのは王宮の奥深い場所にひっそりとあった、宝物殿。その宝物殿から、決して失われてはならないものが、失われてしまった。

その宝は今も行方が知れず、人々を嘆かせている。

その宝については、王家伝承第1項に記されており……

「さて……どうしようかな」

「デュー？」

「ん、どうしたの？」

「それはこっちの台詞。ぶつぶつ言いながら何書いてるの？」

さっきから目立ってるんだけど、と。

そついう君が一番目立ってるとは、あえて教えないでおく。

「アルナディアで地震があつたでしょ？ それについて噂を集めて書き溜めてるんだ」

「何で？」

「新聞社に売りつける」

「………何で？」

「隣の大陸とはいえ、遠いからねえ。実はよく知らない人間が多い。もともとから皇国の内情に詳しい人間が書くのと、これから初めて調べる奴が書くのじゃ、天と地ほどの差があるんだよ」

「ふーん………」

納得したのか諦めたのか分からない体でもぞもぞと戻っていく様は、非常に可愛い。

彼女の世界のデザインである「むねぼけつ」とは、最早定位置である。

余りに斬新過ぎるデザインのせいで目立ってるとは、教えない。

僕たちは今、アルナディア皇国のあるユシアーラ大陸の南方に位置するアスラ・トーリオ大陸にいた。

これも面白い話なんだが、リュイは大陸の名前を出すたびに考え込む。

そしてしばらく黙っていたのち、「……並び替えじゃん」と言うのだ。

ここ数日の彼女の話や反応から察するに、彼女の世界とこの世界は色々似ているらしい。

それも違和感を覚える程度に。

「これからどっちに行くの？」

二人で行動を始めてから、彼女は僕が移動する度に行き先ではなく方向を聞くようになった。

慣れない世界での不安がそうさせるのかは分からない。

けれどわざと言ったのと違う道を進んだ時のリュイの様子は、僕の加虐心を煽ってくれる。

拳動不審になって、おろおろとする様が、堪らない。

「この町の北側にある仕立て屋」

「服でも作るの？」

「いや、このデザインを売りつける」

とんとん、と「むねぽけつ」を指した時に、指先に彼女の柔らかい太ももを感じた。
なんて役得だ。

「こんな画期的且つ斬新で美しいデザインは類を見ない。1000デシルぐらいは取ってやろう」

ちなみに1000デシルあれば5日は食べていける。

おまけにリュイに至っては食費も宿代もいらぬ。

食事は一匙のスープで満腹だと言いつし、眠るときは勿論一緒だ。誰がなんと言おうと一緒だ。

リュイが泣こうが嫌がろうが一緒だ。

しかし残念なことに、リュイは嫌がった例がない。

僕が彼女の嫌がる姿に興奮を覚えることを知ってか知らずか。

まあ、これも計画通りだから仕方ないな。

「君の服を作らせてもいいね」

「……かわいそ」

何が可哀相なものか。仕立て屋はさぞ自らの幸運に感謝するだろう。

「そう言えばさっきの宝つて、何？」

これも旅を始めてから分かったことだが、リュイは読み書きに困らない。

どころか、全ての言語を扱える。
リュイ本人には教えていないが。

「さあ」

「さあつて……」

「諸説あるんだよ。皇国を興した初代皇帝の剣だとか、神様の唾液
だとか」

「へー」

神様の唾液なんてある訳ないのに、全て信じるのがリュイの良い所
だ。
扱いやすいとは言わないけどね。

「後は……ビート・メイルだとか」

「ビート？ そんな神様いた？」

「全て、と言う意味だよ」

「ふーん」

話しているうちに件の仕立て屋についてしまった。
もう少しリュイと話していたいから消し炭にしようかと思ったが、

リュイが思ったより仕立て屋を楽しみにしていたので、今回は諦めた。

むねぽけっと（後書き）

変態の意外な人気。

仕立て屋（前書き）

投稿の間隔が開いて申し訳ないです。
お気に入り300行きました。
ありがとうございます1

仕立て屋

デュー、もとい変態に連れられ訪れた仕立て屋。そこにいた少年に、私は心底驚いた。

「彼方あ？」

「うげっ」

「ふうん？」

そこにいたのは染めて大分経つ茶髪に、赤いピアスの忘れもしない双子の弟だった。

沈没した船に一緒に乗っていた肉親の一人。

・ ・ ・ 彼方は、死んだと思ってたのに。

彼方のほうはと言えば、最初の一声は変態に向けられたものらしく、私の姿を見つけるなり奇声を上げた。

「なになに何でお前、ここに、つつーか、えええええええ！？」

「ちよ、落ち着いてよ、彼方！」

「……どんな関係なのかなあ」

弟は弟で完全なるパニック状態だし、変態は変態で色々想像して妖しい笑いを浮かべている。
もうっ。

感動の再会はどこに行った！

「デュー！ これは双子の弟だから殺さないでよ！ 彼方も落ち着きなさい！」

「ああー……」

「似てないけど、ねえ」

「二卵性だつてば！

それからデューを説得するのに小一時間かかってしまった。
けど私の努力の甲斐もあり、大事な弟は無傷のようだ。
彼方は彼方で、まだショックから抜けてないらしい。

「おいおい、マジで？」

「それはこっちの台詞。ねえ、他には？ パパやママには会ったの？」

「いや、こっちに流れ着いたのって、俺だけだと思ってたし。誰に

も会えてねえよ」

「そっか……」

「ところで瑠璃こそ何でそんなちっさいんだよ」

「ル……リ？」

デューが不思議そうに私の名前を発音して、眉を顰めた。

「リュイ、が本名じゃないの？ ルリなの？」

「うん。こっちの人には発音しづらいみたいだから、無理しないでいいよ」

「……絶対発音して見せるから大丈夫。……それよりほんとに弟？」

まだ疑ってるのかこの変態は。

二卵性とは言っても、結構似ているはずなんだけどな。

「君、カナタだっけ？ いつからこの仕立て屋にいるのかなあ」

「えーっと、一年前ですけど」

「は？」

いちねん？　って、一年？

それはおかしい。だって私はせいぜい十日くらい前にアルシファーたちに拾われたはずだもの。

「リュイは、確か十日も経ってないはずだよねえ」

「まじ？　瑠璃」

「そうみたい。ってゆうかあんた、今ちよつと笑ったでしょ」

「知らねー」

この不良め！

それにしても何で彼方のほうが一年も先にこの世界に来てるんだろ
う。

ここまで来るのにタイムラグがあつたってことだろうか。

「それより瑠璃、お前なんでちっさいの？」

まだそこを気にするのか。

私だって分かんないわよ！

おそれ

とにかく、彼方が生きていたことはとても嬉しい。

パパとママも、どこかで生きていてくれたらいいのに・・・。

変態が疲れたとか休みたいとか言いながら彼方をやや脅すと、彼方は今住んでいるという部屋に私たちを案内してくれた。

出されたお茶が緑色だったので期待したが、味は紅茶だった。

「そつえば、彼方はデユ　と知り合いなの？」

「いや、別に？」

と言いつつ変態と一定の距離を保つ姿は、どうやらこの変態の危険性を熟知しているようだ。

それも後で聞きださないといけない。

一年もこっちにいたなら、私より知識も多いはずだから、色々聞きたいし。

変態はたまに間違った情報をわざと教えてくることがあるから、油断ならないのだ。

こんな時に弟つてのはいいもんだ。

でも私より丸一年分年をとった弟は弟つて言っただけなのかな？
でも彼方をお兄ちゃん扱いするのは嫌だしなー。

「何をさっきから悩んでるの？」

「たいした事じゃないから、いいの」

「僕に言えないこと？　．．．るり」

びつくりした。いつの間にそんな綺麗な発音を身につけたのか。
ああ、そういえばずっと無視してたから忘れてたけど、随分前から一人でぶつぶつ言ってたな。
変態も満足げに私を見下ろしている。

「ふふふっ」

「．．．．．」

満足そうだからほっこり。関わるとうるさくな目に会わないのは、重々この身で体験したし。
気まずい空気を何とかしようと、彼方が頑張って話題を振った。

「で、結局何しに来たんだっけ？」

そうだった。

変態はお茶を飲み干すと、胸ポケットに入れっぱなしだった私をテーブルの上に降ろして、彼方に交渉を始めた。

彼方もやる気が無いわけではないみたいだから、放っておくとする。

この世界に来てからスルースキルと放置スキルが格段に上がった気

がするのは、多分気のせいじゃない。

だけど私にもスルー出来ないものはある。

そう・・・それはお風呂！

それから着替え！

こんなサイズだから着替えなんて見つかるわけないし。ずっとセーラー服は辛い。

変態の要望により、今はちゃんとスカートのセーラーだけど。それに、それに・・・。

まあ、お風呂にいたっては変態も少しは寛容だ。
小さなたらいにお湯を張ってくれて、ちゃんと小さな石鹸やタオル代わりの布も用意してくれる。

セーラー服とあれもそのとき洗うわけなんですよ。
でもお風呂からさっぱりして上がった後も、替えの服なんて無いわけ
で。

だからいつもいつも、適当な布を体に巻きつけて過ごすという、羞恥プレイに耐えてるわけなんですよ！

しかもそのまま変態と同じベッドで寝ることを強要されるのだ。

あとで彼方に着替えとパジャマくらいは縫ってもらおう。

でも弟にあれを縫わせるのは嫌だ。絶対嫌だ。

・・・どうしたらいいんだろ。ちっちゃいのって、意外と大変なんだ・・・。

「るり」

「デュー？」

どうやら話は終わったらしい。良かったね。

「カナタの師匠はあの仕立て屋の女主人でね、あとで君の着替え一式縫わせるから安心してね？」

「……………え？」

「僕ももう限界なんだよねえ、実は」

ふふふつと笑う変態の目は、笑っていない。

着替え一式。凄く嬉しい。嬉しいけど、何か怖い。

いいや、スルーだ、スルー。

変態はまた私を胸ポケットに入れると、彼方にお茶のおかわりをした。

「デュー」

「ん？」

「……………ありがとう」

「お礼は大きくなってからもらうよ」

その言葉にまた怖くなって、私は胸ポケットの奥深くで小さくなった。

デューに優しくされる度、素直になりそうな自分が怖くて、消えてしまえばいいと思った。

それから、アルシファーやライズや、ルナ・メール号の人達に無性に会いたくなった。

デューにこれ以上振り回される前に、会いたいと思った。

記憶の人（前書き）

久々のご登場。

記憶の人

最後に見たのは、泣きそうな笑い顔。いや、既に泣いていたのかも知れない。

こう言ったらあの子は怒るかもしれないが、彼女は小さくて本当はどんな表情をしていたか、なんて分からない。それからあの子を手にして微笑む、地上の悪魔。

あの日から毎晩のように、俺は夢を見ていた。

「・・・ファー、アルシファー」

「ああ、ライズか」

俺は皇家に伝わる秘文書をそつと元に戻し、ライズからそれを受け取った。

それ モッソスの悪魔壊滅の記事を。

ライズは苦笑を浮かべている。

「まさか、あの男がこんなことするなんてな」

「本気だ、と言う意思表示だろう」

俺達がリュイという大きな犠牲を払ってモッソスの悪魔から解放された次の日、それは起きたらしい。

たった一人の男による、モッソスの悪魔の解散だ。
解散と言っても生き残りは極わずか。事実上の壊滅だ。

起きたらしい、というのは俺達は与えられた船の上で、そんな情報が流れてくる訳は無く、疲労困憊で皇国の港に戻ったところでその話を聞いたからだ。

たった一人の男、それはデュファンスで間違いない。

そしてあの男は、リュイを連れたままいずこかへと消えたのだ。

「本気ね・・・そう言えば、何読んでたんだよ」

「皇家の隠し文書だ」

「・・・本気か？」

「俺が冗談でこんな危ない橋、渡ると思うのか？」

「いや」

首都に着き、モッソスの悪魔壊滅の報を受けた俺達は、ひとまず情報を集め始めた。

マリスを始めとする船員たちに、十分な休息をとらせることも考えてだ。

しかしそこにあの大地震だ。

そのごたごたに巻き込まれ、ルナ・メールのものを散り散りとなり、俺たち二人は首都で瓦礫に埋まった人間の救助活動などを、軍と共に行うことになった。

メールを扱う者の仕事に、災害時の加勢も含まれているのだから仕方ない。

しかしそこで俺達は、最前線で軍を指揮していた第2皇子の目に留まってしまった。

それで一部が壊れた皇宮に滞在を許されているのだ。

「……少し寝ろよ」

ライズが気遣うなんて、今度は津波でも来るかもしれない。だが折角気遣ってくれたので、口には出さない。

「あの子に会ったとき、そんな顔してたら、リュイは泣くぞ」

そう言われて、ここ2、3日ともに食事も睡眠もっていないことに気がついた。

俺は、どれほどやつれた顔をしているのだろう。

それでも。

俺は、何かしていないといられない。

今もデュファンスがあの子の傍で何かしているのだと、想像するだけで身体が勝手に動くのだ。

「……まあ言っても聞かないか」

「いや、今日はこれぐらいにする」

「で、隠し文書には何が書いてあった？」

わくわくと少年のように期待する瞳に、俺は嘆息した。わくわくするな。一応犯罪だ。

「……殿下が、依頼された探し物についてだ」

「ああ、皇家の秘宝ね」

先の災害で消え失せた皇家の秘宝。

第2皇子は、俺たち二人にその搜索を願ったのだ。

その対価が皇宮の滞在許可と、皇家が公開してこなかった文書を見せると言うものだった。

「まさか、な……」

「は？」

「見る」

ライズに見せたのは、先ほど俺がようやく発見した、秘蔵中の秘蔵文書。

これは皇子に許可を貰ってないので、見つければ罰を与えられるだろう。

「え？　ちょっと待って。これ・・・！」

「・・・一刻も早く、リユイを見つけたいとな・・・。」

代々の皇帝にしか伝えられなかったと言う秘宝の正体が、その題名がかすれて読めない文書の中にあった。

可愛らしい絵柄のそれは、まぎれもなく、リユイが「せーらーふく」と言っていた物だった。

記憶の人（後書き）

まあ、予想通りの流れですね。

幕間1（前書き）

「さよなら」と「むねポケット」の間辺りのお話です。
気軽に読んでいただければ、幸いです。

幕間 1

月の明かりが、狭い部屋の中を照らす。
彼女と僕を、照らし出す。

「……リュイ？」

安宿の薄い寝台の上に横たわる彼女から返事はない。どうやら眠っているらしい。

僕は安堵し、彼女の柔らかい体を撫で上げた。

「ねえ、いつになったら、君は大きくなるのかな……」

早く大きくなって欲しい。
そうしなければ繋がることもできないから。

「リュイ……」

湿った体は、花を織り交ぜた石鹸の香りがして、僕はくらくらした。
リュイの為に、一つの海賊を滅ぼした。
リュイの為に、こんな遠い大陸までやってきた。

けれど彼女が僕を見ることは無い。

彼女がいつも探す面影は、唯一命を奪わなかったあの男だ。
彼女が泣くのは、その男の為だから。

憎い。

愛しい。

殺したい。

守りたい。

笑わせたい。

泣かせたい。

けれど、やっぱり愛しい。

「リユイ・・・」

僕はきつと、君に微笑みかけられるだけでいいのだ。

一度でいい、君が僕を「好き」だと言ってくれるのならば。
それだけでこの想いは報われるような気がする。のに。
同時に、君の全てを欲しがる僕が居る。

「
好きだよ」

夢ばかりじゃ、耐えられない。
耐えられないんだよ、リュイ。

月の光が僕を照らした。

僕の中のどろどろとした欲望も、落ちる影の中に混じった気がした。

幕間1（後書き）

誰と言わなくても分かるかも知れませんが、デュファンス（変態）の気持ちでした。

お気に入り登録してくださった皆様、感謝しております。

お気に入り登録増加〓感想頂く〓テンション上がる〓更新、な感じでやらせてもらってます。皆様のおかげです。ありがとうございます。

女神の失敗（前書き）

本編に戻りますよー。

女神の失敗

随分眠っていたらしく、外はもうすっかり日が暮れていた。
ふわふわのクッションの上に寝かされていたらしく、起きた瞬間危
うく落ちそうになった。

部屋を見回しても、誰も居ない。

ランプには明かりが入っているから、きっと誰か戻ってくるだろう。
そう思い、クッションから降り、久しぶりの一人と言う時間に息を
吐いた。

この世界に来てから、起きている時間に一人なんてことは、無かつ
た。

誰かが必ず傍にいた。

だから、少し不安に感じたのは、おかしいことじゃない。
おかしくなんかない。

「……最近寝る時も一緒だったしな……」

うん。これは良くない、かも。

私は小さいんだから、変態と一緒に寝台で寝る必要性は、全く無い。
なのに拒否しなかったのは、きつと疲れていたからだ。うん。

「瑠璃ー起きてんのかー」

「はいはい」

返事をすればやや憔悴した彼方が現れる。
手にお湯を張ったたらいがあるから、きつとデューに言われて持ってきたんだろう。

「風呂」

「ありがと。・・・なんか、疲れてる？」

「あ？ まあ・・・」

言いくそうにしている。

きつと変態の扱いが分からなかったんだ。この弟は。

あーいう変態は、適度に話を聞き、言動の8割は嘘だと思わなきゃ。
8割でも足りないくらいだ。

彼方は良くも悪くも素直なので、変態の言う事を一言一句真に受けたのだろう。

我が弟ながら、哀れな奴。

「あの人さ」

「ふんふん」

「瑠璃の彼氏？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・は？」

いけない。きっと彼方には変態の言動は衝撃が強すぎたんだろう。だから血迷っているんだ。そうに違いない。
しかし彼方は至極真面目な顔で、しかし少し耳を赤くして言ったのだ。

「だって、同じベッドで寝てるんだろ？」

「・・・・・・・・ただの節約」

「今のお前のサイズで言う？ それ」

「・・・・・・・・」

これはもう、後でおしおき。強く言えば折檻。
ええ、誰をとはいませんが、誰をとほ。

あのお馬鹿変態め！

湯を浴びて体はすつきりしたところに、デュファンスが誰かを伴って部屋に入ってきた。

誰かを見れば、ほっそりした女性。かなりの美人です。しかし、その顔は、どこかで見た。

「師匠！ 何でそいつと！？」

どうやら僥け系美女は彼方のお師匠らしい。つまりは、仕立て屋の店主かな。

彼方の師匠は男性だと思っていた私には、軽いショックが。しかし、そんなショックを忘れるほどの衝撃が、私と彼方を襲った。

「何故って、弟とは久しぶりに会ったものだから、つい話が弾んでしまっ」

「姉上になるの採寸をしてもらうからねえ」

「・・・・・・・・・・は？」

いけない。脳が動きを止めてしまった。

「デュー？ 姉上って」

「ああ、話してなかったね。僕の姉上だよ」

「初めまして、リュイさん。まあ、本当にお小さいのね」

誰かに似てると。

思ったその時に気づけばよかった。

彼方なんて放心状態、いや絶句しているから、哀れである。

彼方、惚れっばいあんだのことだから、きつとこのお師匠さんにも恋していたんでしょう。

哀れな弟を思つて、私は思わず目頭が熱くなった。

姉ですが、何か？（前書き）

番外編を「374号室へようこそ！」に載せてるので、よければご覧下さい。

姉ですが、何か？

変態、もといデュファンスも人の子だったと言っただけだ。うん。それにしてもデューにお姉さんとは、驚きである。しかも美人。確かにデューも、性格を除けば相当な美形なんだし。

お姉さんが超美人で、その上親切で優しくて気さくで、とにかく良い人でも驚いてはいけない。きつと。

「ふふ、リュイさん、色はどんなのがお好き？」

「黄色か紫、それが黄緑なんかもるりには似合いますねえ」

「刺繍を入れましょうか！ お花と小鳥、どちらがよろしいかしら」

「小鳥がいいですよ、姉上。飛び立ってしまわぬか不安ですが」

声を大にして言いたいのを、必死で抑える。

何故お前が答える、と。

さっきだって、採寸をするのにも立ち会うと言っから、慌てて出て行かせたんだもの。

彼方に至っては放心状態だったので、変態が摘み出したけれど。

もういい。勝手に決めればいい。
どうせお金を出すのはデューだ。

これが自暴自棄というもののか、と思ったり思わなかったりしながら、紅茶らしきものを口に含んだ。既に冷めていて、少し悲しくなった。

「ところで、リュイさんはこれから弟とどちらへ行かれるんですの」

弟、の部分に若干引き攣ってしまったが、顔には出てないはずだ。お姉さんの疑問は、私の疑問でもあった。

「ええ、アルナディアに行きたかったんですが、しばらくは無理でしょう」

「そうですね」

「とりあえずメサファの所にも行こうかと」

「まあ、ご交流がありました？」

「ええ、少々」

なんだか変だな、と会話を聞いていて気づいた。

変態が常識人 それも貴族 のような喋り方をするのだ。

ちらほらいつもの変質者ぶりも現れるが、基本は丁寧で、威厳がある。

お姉さんのほうも、上品だ。

街で耳にしたような女性達の話し方とは、全く違う。

二人とも、絵だけ見れば、まるで王子様とお姫様のような……。

「るりに掛けられた魔法について、メサファに聞きたいことがあります」

「まあ」

「え？　魔法？」

口を出せばずっと変態の視線がこちらに戻る。見下ろすな。

「　　きっと、ね」

「……っ」

その時の変態の顔と言ったら、目は笑っていないし、口許は頑張っただけ作りました！

みたいな、普段からは想像もできない恐ろしい表情だった。

やめよう。

これ以上この件に関わるのはよそう。私は決意した。
それが例え、自分自身にかなり関わる問題であっても。

これ以上精神がどうのこうのなるのは、御免こうむる。

「ま！ デュファンスったら、そういう事は二人の時になさいな」

「申し訳ありません、姉上。彼女がつい可愛くて」

「分かるわ、もう、リュイさんったら、抱き締めて頼ずりしたくなるような可愛さですもの」

「いけませんね、彼女は僕のと決まっているんです」

「あら嫉妬ですか？ 独り占めはいけませんわ」

「姉上は彼女の弟君で我慢なされば宜しい」

「わたくし、年下を愛でる趣味はありますが、恋人にする気はなくってよ！」

「これは、手厳しい」

うふふ、ははは。

うまく回らない頭でやっとな理解できたことは一つ。

彼方は振られちゃったという事だけだ。

魔法のミルク

その夜は、四人で食卓を囲んだ。
料理したのは勿論、彼方一人である。

「んー美味しいっ」

久々のグラタンらしきものと餃子らしきものと、うどんらしきものに舌鼓を打つ。

残念ながら、まだお米はないと言うことで、小麦粉で頑張ってもらったのだ。

久しぶりの懐かしい味に涙が出そうになる。

でも泣いたら変態がおかしな目をこちらに向けるので、頑張って抑えた。

流石だ、弟よ。

「へえ・・・？ これがるりの国の料理なの」

「えっと、日本のつて言うか、私の世界の料理」

「まあ、ほんとに美味しいですね。彼方、お替りはまだですよ」

「ハイハイ今お持ちしますよ」

泣くな、弟よ。手伝ってあげたいけど、それは無理だし。
ここのお二人様は手伝う気なんか絶対ないだろうし。

見てて思っただけで、やっぱり姉と弟なら似るものだね。

彼方のお師匠様 ウェリーナ様というらしい は、はっきり言
って変態に似ている。

たまにこちらを怪しげな目で見ているのを、私は気づかない振りを
して対応するしかない。

あれ？ じゃあ私と彼方も似てるの？
え、それやだ。

ほぼ食事が終わったところで、彼方はなんだかそわそわしだした。

「あー俺ちよつと出かけてきます」

「でしたら白い糸も買ってきて下さいな」

「はいはい」

うーん。彼方つてば、弟子っぷりが見事に板についちゃってる。

ま、いいや。お姉ちゃんは温かく見守るだけだから。

彼方がいなくなった部屋で、ウェリーナ様はほうつと息をついた。

「それにしても、残念ですわ。普通のサイズでしたら、いくらでも
服を作って差し上げますのに」

「はあ」

「ところで姉上、彼方とやらが小さくなったことはないんですか？」

「勿論よ」

彼方が小さくならないと言うことは、これは私だけの現象なんだろう。

もしかしたらこの世界と私の世界では、人間のサイズがそもそも違うのかと思った事もあったけど。

その線は限りなく薄いようだ。

「どのくらいで服はできます？　姉上」

「そうですね・・・細かいので、三日ほど頂ければ」

「わかりました。金に糸目はつけません」

「まあ、ほほほ」

「ただいまー」

少々息を切らせている彼方に、ウェリーナ様は笑顔でさらりと言う。

「ご苦労様。それを明日の朝までに、赤と青とピンクと黄色に染め分けておいて下さいね」

ある意味変態よりも鬼畜な発言に、彼方は青褪めながら了承した。多分人生で五回くらい彼方を尊敬するだろうけど、確実に今の一回分を消費しただろう。

青褪めていた顔をほんの少し回復させて、彼方はまた台所に立った。そういえば、向こうにいた時から彼方は料理が上手だったわけ。何かデザートでも出てくるのかとわくわくしていたら、それはやってきた。

白い液体のそれ。

お風呂上りに必需品なそれ。
私が世界で一番好きなそれ。

「彼方！ これっ・・・！」

「ああ、牛乳」

なんてこと！！

私はごくりと喉を鳴らし、それをじつくりと見つめた。

「どうせこっちに来てから飲んでないんだろ？」

「の、飲んでいいの？」

いつもお風呂上りの牛乳を争っていた弟が、わざわざ買ってきてくれるだなんて！

やっぱり持つべきものは弟だ。

気づけば変態とウエリーナ様がこっちを見ていた。嫌そうな目で。

「るり・・・それ飲むの？」

「と言うか、飲めますの？」

何故？ と首を傾げれば、彼方は言い辛そうに白状した。

「こつちじゃゲテモノの分類に入るんだよな、乳製品って。原材料の牛乳なんて特に」

「へ、へー」

だから、今までお目にかからなかった訳だ。

でも、味が同じならそれでいい。

実のところ、そろそろ牛乳のない生活に限界も来ていた。

「いっただつきまーす」

じっきゅじっきゅじっきゅとね。

ぶはっとな。

「やっぱりおいしー…………い？」

ん？

…………何だろう。この違和感。
…………何だろう。この視線。

んん？

「…………はっ」

「…………あら、まあ」

「…………マジ？」

「え？ え？」

私もかしなくても、おっきくなってる？

嘘でしょう？

魔法のミルク（後書き）

カルシウムは成長に大切。というわけです。

聖人と魔物と天使（前書き）

R 1 5 注意。

聖人と魔物と天使

「……っは」

思わず、息が漏れてしまった。

「え、何で？ 牛乳で？」

生まれたままの姿で食卓の上に座る天使に、身震いした。
次いで体中の血液が逆流したかのような衝撃に、肌が粟立つ。

「ととりあえず服！ 師匠、服！！」

「あらまあ」

馬鹿じゃないのか、彼方とやらは。

こんな、神が自ら手に掛けて創造したような裸体を目の前にして、
服を着せようなどと。

愚か者め、いくら弟とはいえ、男として失格だな。

急な服も用意できず、とりあえず白いシートに包まっただけのその
姿に、逆流した血が沸騰する。

今すぐ押し倒したい。

口付けたい。

僕のものにしたい。

長い黒髪に指を絡ませて、香りを確かめて、口付けて。

そのまま体中に、「自分」の印をつけたい。

とにかく触りたい。撫でたい。

「るり……」

痰が絡まって上手く名を呼べさえない。

呼んで、こちらを見た瞳に奪われかけた理性を、必死に取り戻す。
こんなところでは駄目だ。

早く、早くしなければならぬ。

いつまた小さな姿に戻ってしまうか、誰も分からないだろう？

「デュー？ わっ」

「……おいで」

るりを抱きしめた時、力を入れ過ぎてしまわなかったか、心配だ。
手が震えるなんて、初めて人間を殺した時以来だろうか。

「デュー？ あの、どこ行くの？ 一回放してっ」

じたばたと足を動かして逃げようとするが、僕からは逃げられない。
絶対に逃がさない。
絶対^{るり}に逃がさない。
君も、こんな好機^{チャンス}も。

「姉上、隣の部屋を借りても？」

「構いせんけど・・・朝食には遅れないで下さいね？」

「保証しかねます」

朝になつても、るりを解放できる自信がない。
しかし姉上は、いつも僕の味方で、嬉しい限りだ。

「この変態！ るりに何する気だ馬鹿野郎！！」

「デュー、ねえっ」

後ろでまだ彼方とやらが喚いていたが、勿論無視する。
ああ、だが一言くらい断りは入れるか。

「安心しろ、お前を弟にするだけだ」

「……あ？ 何だそんなこと？ ……か？」

「この馬鹿！ 意味分かりなさいよ！ 馬鹿彼方！」

「………あー！？」

馬鹿め。だがお前が馬鹿で、僕は嬉しい。

弟ができるなんて煩わしいだけだが、るりの唯一の血縁と言っても過言ではないから、仕方ない。

コイツが「牛乳」をるりに与えたことは、いつか褒めてやらねばならないしな。

「まあまあ彼方、私たちもお茶でも飲んで、ゆっくりしましょう」

「師匠ー！？」

馬鹿な将来の弟は、姉上が足止めをしてくれるだろう。
これでもう、誰にも邪魔はさせない。

るりは、僕のものだ。

聖人と魔物と天使（後書き）

次回暴走するか、暴走しないか。
どうしましょうか。

天使の悪魔（前書き）

R15で抑えます。

天使の悪魔

あの「牛乳」の効果は、一体どれくらいなのか。
万が一のことも考えて、ことは早く為さねばならない。

「・・・デュー？」

小さかった時はよく見えなかった、細かい顔の部品は、見れば見るほど「彼女」にぴったりだと思う。

大きすぎず小さすぎない、けれどしつかりと光を放つ瞳は、象牙色の肌に埋もれてこちらを見返している。

淡い桃色の唇は、食らい付いたらきつと放せない。

ちいさな耳たぶは、そつと囁いたら色づくのかもしれない。

しかし今、それらは全て、怯えている。

これから乱暴をされるのではないかと。

どれ程か分からないが、築き上げた信頼を崩されるのではないかと。日常を破壊されるのではないかと。

はつきり言って怯えさせるのは、好きだ。

特に好意を持つ相手ならば、苛め抜いて泣かせて、最後に優しくしてやるのは堪らない。

だからこのように怯えられたとしても、また泣かせたとしても、一向に構わない。

むしろ歓迎してしまう。

けれど。

「ね、あっちの部屋に、もどろ？」

この子には、るりには、ただ一人の女性には。

「どうしたの？ 具合でも、悪いの？・・・」

求めて欲しいと思うから。

僕自身を、心から求めて欲しいと思うから。
無理強いなんて、できやしないだろ？

「るり」

「な、に？」

少し恐怖が弛んだ瞳に、説得してみようか。
けれどどうすればいい？

正しい愛の伝え方なんて、僕は知らない。

「ぎゅってしていい？」

「・・・・・・・・それだけ？」

そんなまさか。思わず鼻で笑ってしまうところだった。

「その次は口付けたい」

「・・・・あ、えつと」

「そのまた次に押し倒して」

「・・・・・・・・」

「できれば・・・」

「待ってデュー！」

真っ赤になったり、真っ青になったり、忙しい子だ。

けれどそんなところも可愛いと思う。

違う、るりは全部が全部可愛いんだ。

それをそのまま告げると、るりは本格的に茹でられた海産物が如く顔を赤くしてしまった。

食欲をそそられる色だ。

「そ、そういうの、好きな人と・・・・」

「好きだよ」

何を今更。

しかしるりは呆然として、僕を穴が開くほど見つめたまま何も言えないらしい。

まあいいか。

とりあえず口付けても押し倒しても、呆然とされる以外の反応が薄かったから、そのままことを進めてしまった。

翌朝彼女に泣きながら怒られたが、何を怒っているのかよく分からなかったので、撫でたり抱き締めたりし、るりをあやして一日過ごした。

ちなみに「牛乳」の効果だが、一晩続くことが分かった。

天使の悪魔（後書き）

ごちそうさまでした。

もうすぐ(前書き)

こっちも動き出します。

もうすぐ

「何度も言う、弁解することがあるならば、聴くが？」

「……………」

「何も話せないと言う事なら、お前たちを処分せねばならない」

帝国宮殿の奥深くで尋問を受けながら、アルシファーはそれでも折れないようだ。

第2皇子からの追及も激しく、それはもう一晩休まず続けられていた。

これ以上は危険と判断し、ライズが話そうとするがアルシファーはそれを押しとどめた。

「アルシファー！」

「黙ってる」

「…………お前たちを失うことは、私にとって大きな痛手だ。できるならば、守ってやりたいと思うのだが？」

「結構。追放でも何でもどうぞ。…………貴方を主人にしたつもりはないので」

「これは、手厳しいな」

薄暗い部屋の中、蝋燭の灯火が、第2皇子の顔を半分だけ照らしていた。

その半分は、微笑んでいるように見えた。

・・・

ことの始まりは、あの秘蔵の文書を読んだことからだ。
ライズと二人で見、そして今の皇家が失った宝こそ、リュイがいつの間にか得ていた服だと分かったのだ。

説明書きは古語で、しかもかなり癖のある字だったので読めなかった。

しかし、挿絵は全く同じと言うことに、俺達は寒気と焦りを覚えた。

もしこれが危険なものだったら？

あの子の手に負えないような力を持つものだったら？

そして万が一・・・その力の為に、あの子が傷ついてしまったら？

ぞつとして、居てもたつても居られなくなるのは、当然のことだろう。

俺達は首都の復興を何か理由をつけて暇を貰うことにし、一刻も早くリュイの許へ行こうと決心したのだ。

しかしその矢先に、第2皇子に感づかれてしまったのだ。

「・・・さて、どうしたものかな」

殺されるかもしれない。

俺達は一万人に一人生まれるかどうかと言うほど、貴重なメールの使い手である。^{マスター}

しかし皇帝家の秘密に比べれば、塵の様な命だ。

「お前たちは吐かない、私は失いたくない……とすれば一つか」

第2皇子の笑みに、不穏なものが浮かんだことに、ライズは気づいただろうか。

「取引をしよう」

「・・・取引？」

「そうだ」

第2皇子は立ち上がり、何の明かりも届かないその表情は、もう窺えない。

「お前たちがあの書物を読んだことは不問に処す。また、一つ願いを叶えてやろう」

「その、代わりに？」

「書物に書かれていた、『皇家の秘宝』。その内容を教えてもらおう」

「・・・なぜ？ 貴方は知らないのですか」

コツコツと皇太子の足音だけが響き、暗闇が彼の人に味方する。

「質問はいらぬ。さて、答えを聞こう」

皇家の秘宝、第2皇子の野望、秘宝の正体。

そんなものは、俺たちにとってはどうでもいい。

知りたいと言うならば、その代わりに願いが叶うと言うならば、俺たちに異論はないはずだ。

「・・・わかった」

「結構」

俺達は、早くあの子の許へ行きたいだけだ。

翌日帝国の港を出発した俺達は、十日ほどかけて、アスラ・トリー才大陸に最も近い島に辿り着いた。

アスラ・トーリオ大陸本土に上陸したのは、それからまた五日程後のことである。

もうすぐ(後書き)

今回は面白くなかったかもしれませんが。

おまけに短くてすいません。

第2皇子が皇太子になっていたところを修正しました。申し訳ありません。

夜露を払う

痛い痛い痛い痛い。

朝起きて真っ先に気付いたのがお腹の痛みだった。

その次にそいつが私を見下ろしているのに気付いた。

変態変態変態。

「るり？ おはよう」

「・・・・・・・・」

誰が挨拶なんて返してやるか！

そりゃあ、流されちゃった私も悪いけど、流すお前は犯罪者だ！

「もう一発していいのかな？」

「・・・・・・・・おはようございます」

それを世間一般では脅しと言っただ。極悪人め。

そうだ。出会った時からこの変態は不埒な発言ばかりしていた。ただの妄想癖かと思ってたのに。

「・・・なんか怒ってる？ るり」

「当たり前です」

「そんなに痛かった？」

「違う」

思ったより痛くなかったもの。

友達の話よりは。

でも今はそんなことは関係ないんだから！

「じゃあ、何」

「・・・」

「るり？」

変態には説明したって分かんないでしょうよ。

愛してるって、初めて言ったその直後にあんなことするなんて、酷い。

好きだなんて言われても、私は段階を踏んで欲しかったよ。

最初は手を繋いで。

キスをして。

それからじゃないと嫌だったの。

告白してすぐしちゃうなんて、そのための告白みたいじゃない。

それにデューは、変態発言をしても、無理やりはしないって思った。

私を、騙してたの？

ずっと？　ずっとずっと？

「当ててあげようか」

私の体はまだ大きいままで、それでも身長差があるから変態にのしかかられると、全く身動きできなくなる。

変態は私にのしかかったまま、耳元まで口を寄せた。

「僕をそれなりに信頼してくれてたんだよね」

「・・・・・・・・」

「無意識に、そうゆうことはしないって、思ってたんでしょ？」

「・・・・・・・・」

「ごめんね」

謝るなんて、最低だよな。

「僕は最初から、やる気満々だったから」

「・・・・・・・・・・は？」

「はつきり言って、一目惚れ」

「・・・・・・・・・・」

「ある意味、騙してたのかなあ」

変態はふふつと笑う。不気味である。

「でも小さいせいでできなかったただけだから。ほら大きくなったし」

「・・・・・・・・・・」

つまりもし正しい大きさだったなら、モッソスの悪魔にルナ・メイ
ルが襲われた時点で、やられちゃってたわけですか。

良かった。最初は小さくって。

そしてもう一つ良く分かったことがある。

デューは最初から捕まっちゃいけない変態だったってことが。
しかし時既に遅し。

何だろっ泣けてきた。

「るり？ まだ怒ってる？ 泣いてる？」

「でゅーのぶあか、ふえんたい」

「泣かないで。泣かれたら、またしたくなる」

「ふえんしつしゃあ」

その後のことは泣いたり怒ったり、眠ったりして、よく覚えてない。ただデューがずっと傍で宥めてくれたから、今回のことだけは許してやろうと思った。

夜露を払う（後書き）

次回はまったりいきたいです。

幕間2（前書き）

「夜露を払う」の後あたりです。

幕間 2

僕はもう一度るりを抱きしめた。

泣き疲れて眠った少女に、口付けを与えたその時、扉が叩かれた。

「・・・私です。ちょっといいかしら」

「姉上ですか。・・・少々お待ち下さい」

もう少し抱き締めていたいけど、帰ってきてからにするとしよう。
頬にもう一度小さく口付けて、部屋を出た。

「何でしょう？ 姉上」

「リュイさんは大丈夫なの？」

「ええ、勿論です」

「食事を用意しましたから、次に起きたら一緒に食べにいらっしやいな」

「ありがとうございます」

姉上に案内されたのは仕立て屋の作業部屋のようだ。

「リュイさんの服ですけど、とりあえず何着か用意しましたの」

「さすがお早い」

姉の腕が確かなのは自分が一番良くわかっていたが、差し出された服の縫製を見てやはりと思う。

この仕立て屋が小さいのは、姉が身を隠すためであって、決して腕が悪いわけではない証拠がこれだろう。

黄色と紫。それに濃い目の桃色も、るりの白い肌に似合う気がして選んだ。

その時目に付いたのは、奥の真っ白なドレスだった。

「姉上、これは……」

「まあ見つけてしまったのね。これは特別に注文を頂いたものなの」

「婚礼衣装、ですね」

それも若い女性の。

美しい、に尽きるその一品は僕に見ず知らずの花嫁を心配させるほどだ。

こんなに衣装が美しくては、花嫁が霞んでしまつのではないかと。

「ま、そんな心配はご無用ですわ」

姉上はまだ未完成と言うヴェールだけとって、僕の前で見せた。さすがに式の前に男の手で触れさせるのはまずいからだ。

「どんな女の子も、結婚式では誰より綺麗なんですのよ」

「……」

「勿論、リュイさんも」

結婚。

花嫁衣裳。

るり。

そこまで想像して、思わず鼻を押さえてしまった。ついでに胸も。

「……姉上」

「はい？」

「一着、お願いしておいても？」

「……ふふ、貴方なら言つと思つたわ」

最初から姉はそのつもりで僕をここに連れてきたらしい。
全く、用意のいい事だ。

「……戻ります」

「ああ、そうでしたわ、彼方を見ました？」

「いえ？」

昨夜からりと部屋にいたので、知るわけがない。

「昨日の夜、泣きながら飛び出してしまったんですの」

「……」

「見つけたら戻らせてください」

「……わかりました」

これも兄の仕事か。なんて面倒な。

そう思いつつ、るりが眠る部屋に戻った僕が、眠る彼女の前で立ち竦んでいた彼方を蹴り飛ばしたのは、誰にも責められることじゃないだろう。

幕間2（後書き）

既に結婚まで想像した変態のお話でした。

朝と求婚（前書き）

まったり行くはずだったんですけど・・・。

朝と求婚

「おはよう、るり」

「・・・おはよう、ございます」

朝起きて、目の前にデューの顔がどアップですか。

これって普通の人の心臓には良くないよね。いろんな意味で。

あ、しかも今朝はちっちゃくなってる。セーラー服もいつの間にか着てるし。

でもまあ深くは考えないのが大事って覚えただけだし、考えるな考えるな。

「朝から難しい顔をするんだねえ、るりは」

「う、まあ・・・それより、この服誰かが着せてくれたの？」

「いいや、君が小さくなった時僕が着替えさせようと思ったんだけど、もうそれを着てたんだよ」

着替えさせようとしてたんですか。

まあそれは置いて、一体このセーラー服はどういう原理なんだろうか。

そもそも何処から出てきたのか。

「・・・まあ、いつか。」

「朝ごはんもあるよ。牛乳飲んだら市場にも行くからね」

「デュー、何かつきつきしてる？」

「ん？ まあね」

まあいいや、デューがご機嫌悪いよりはましだよな。

そう思つて流したことが、この後大きな問題になるとは思つてもいなかった。

隣の部屋へ行くと、上機嫌のウェリーナ様と沈みきつた彼方がもう席についていた。

彼方の沈みようはまるでお通夜でもあるかのように半端ない。一体何があつたんだろう。

「ウェリーナ様、彼方、おはようございます」

「まあっお姉様って呼んで下さらないの？」

「……………はい？」

お姉様？ ウェリーナ様が？ ちょっと待って。

「……………デュー？」

「何かな？ お姫様」

「……お姉様って、どういうこと？」

「どうもこうも、そのまんまの意味だと思っけどねえ」

そのまんま？ そのまんまってどういう意味ですか？
思考が音を立てて停止するけれど、どうやらお二人はそれを許してくれないようだ。

「契ったんだから、君はもう僕の妻で、僕はもう君の夫だろう？
ね、当たり前の話だ」

「ですから、リュイさんが私の義妹で、私がリュイさんの義姉ということですわ」

「きゃっ」とか言いながらはしゃがないで下さい。
まさか、こっちの世界ってしちゃったらもう夫婦なの？ ねえそうなの？

「えーと……」

「と言うのは冗談でね、るり」

「……はい？」

今さらつとした顔であつさり冗談って言いました？ この鬼畜変態は。

「じよ、冗談？」

「そう。冗談。でもまあ座つてよ、ここに。あ、その前に牛乳飲んでね」

差し出された牛乳を飲めば、体は元の大きさに戻り、着ていたセーラー服もなぜかそのまま大きくなった。

ほんとにこのセーラーはどんな素材でできてるんだか。

そして言われるまま座れば、相変わらずニコニコしたウェリーナ様と意気消沈した彼方に向つて、デューは片手を挙げてとんでもないことを喋った。

「お二人には両家の代表と言うことで、立会いをお願いしますね」

「ええ、分かつてますわ」

「けっ」

「……なに？ 何がこれから起こるの？」

デューは「では」と言うと、真剣な顔をして座っている私の前に膝き、私の右手をとった。

「私、デュファンス・イザール・ヴォル・アルナデイオは、ヒラーノ家のるり姫に永遠の愛を誓い、私との結婚を望みます」

そして、右手の指先に口付ける。

・・・はい？

・・・今の、なに？ 結婚を望みます？ ヒラーノ家って平野家？ 私の家だよね？

これ、もしかしくなくても、プロポーズ？

「・・・返事は急がないから、ね」

そして拒む間も無く、触れるだけの優しいキスをされた。

わたし、デューに求婚されちゃったんだ。

朝と求婚（後書き）

求婚しちゃいました。はい。

市場と喧騒

今どこにいるか分からないお父さんお母さん。

瑠璃は、人生で初めて求婚されました。

「返事は急がないだなんて、ずいぶん強気ですこと」

「まあ、自信がありますので」

「いいか！ 俺は認めねーからな！」

彼方、あんたが認める認めないの前に私の意見をきいて下さい。
この状況で即断するのも・・・。

でも、ひとつだけ分かった。

デューは、本気なんだ。

「姉上、食事が済んだらるりの着替えを手伝って下さい。今日は市場へ行ってきますから」

「ええ、勿論ですわ」

着替え？ ああ、そういえばこの世界の服ってまだ一度も着たことないんだっけ。

その日の朝食は彼方が腕によりをかけてくれたらしいけど、味がさっぱり分らなかった。

着替えの時にウェリーナ様が教えてくれたけど、この世界の女性の服は、民族的なものを除くと大まかに三通りあるらしい。

膝丈のワンピースは未成年の女の子が着るもので、色に縛りはない。成人し、なおかつ未婚の女性はすねが隠れるくらいの長さのワンピースで、強い色彩の色はあまり着ないらしい。

そして既婚女性は未婚女性の衣装の下に、薄手のズボンを履くのだそう。

つまり、この世界の男性は女性の衣装を見て、その、声を掛けたり掛けなかったりするそう。

ちなみに未婚女性が、決まった男性の存在を知らしめる場合は、恋人か婚約者が選んだアクセサリをつけるのが昨今の常識らしい。

町に出てズボン履いてなくてアクセサリも無し、の女性は完璧なフリーと言うわけです。

まあでも実際町の人混みを歩いてみると、そんな女性はお店の中ぐらいいにしか見当たらないのだ。

「当たり前。そんな主張して悪い男に路地裏に引っ張り込まれたら、貞操はパアだからね」

「へ、へー……」

「……さつきから、君をチラチラ見てる奴がいるの、分からない？」

「え、えーと……」

それで先程から不機嫌なのでしょうか、貴方は。

デューと市場に繰り出して感覚的に一時間位経ったけれど、かなりの不機嫌さに、思わずビビッてます。

服は淡い若草色の成人未婚女性の衣装で、アクセサリーなんて勿論付けてない。

ウェリーナ様が危ないから店にあるのを付けていったら、と言ってくれたけど、デューが断固として許してくれなかったのだ。なのにこの不機嫌。ほんとに訳分からん。

手をもう少し優しく握ってもらいたいけど……無理だね。

市場は人で溢れかえっていて、デューと手を繋いでいないと簡単にはぐれてしまう。

それにデューの言うとおり、さつきから視線が痛い。

おかしい。

西洋人ぽい顔つきが多いこっちじゃ、確かに珍しい顔立ちかもしれないけど、そんなに注視するほどかな？

けどそのわけをデューに問うのも怖くて、ただひたすら連れられるまま歩いた。

「やっと着いた……入るよ」

「え、え？　ここ？」

そこは市場を通り抜けた先で、高級そうな佇まいのお店がたくさん並んでいる一画だった。

市場のお店はお祭りの露店のように、ドアもなければ壁もないテントだけれど、デューが入ったお店はちゃんとした「店舗」だ。

そこに堂々と入っていくデューに、彼を店員総出で迎える店。
……ほんとに、貴方誰ですか。

お店に入ると、デューはまるで貴族のような……威厳のある言葉遣いになった。

それに、立ち居振る舞いも、二人の時とは違うのは明らかだ。

ウェリーナ様と話す時といい、この豹変振りは何なんだろう？

「るり」

「あ、な、何？」

「どんな石が好き？」

お店の人が絹を敷いた台座に乘せて持ってきた宝石を眺めながら、デューは真剣に眉を顰めている。

……それ、かなり高価そうですね？

「か、買う、の？」

「当たり前。いい虫除けが必要でしょ？」

多分デューが言いたいののは、男性避け、という意味なのだろうけど。
……顔から火が出そうなのは、一体何なんだろう。

「……カナタが、君の名前は宝石を指しているって言ってたけど」

そういえば、瑠璃ってラピスラズリだっけ？

でもこの世界とあっちの世界って、宝石の名前も一緒なのかなあ？

「うん……深い青色の石、なの」

「これ？」

「それっ、それなの！」

びっくりした。小粒でも、それは確かに「瑠璃」だったから。

深い青色の石、なんて大雑把過ぎる特徴の上、そんな石たくさんあるのに。

一発で見つけるなんて、デューには超能力もあったのか。

そう言っと、デューははにかんだ。

はにかんだのです、デューが。

「・・・いい名前を貰ったね」

後で聞いた話によると、こつちの世界じゃ混じり気のないラピスラズリは眼が飛び出るほど高価で、貴族でさえ『皇家の石』と呼んでなかなか身に着けられないのだそうだ。

ええ、勿論デューはそれを購入しましたとも。

そんなに高価な石だとは知らなくて、止められませんでしたとも。

ただしラピスラズリは高価だから、細工せずにお店に置いて、買う人が現れたら注文に応じてアクセサリーにすることとで、デューの機嫌はまた悪くなりました。

お店の一番偉い人が泣きそうになりながら、最優先で仕上げると頭を下げていましたよ。

その姿に思わず涙ぐんでしまいましたとも。

とにかく、デューって何者？ な、初めてのお買い物でした。

市場と喧騒（後書き）

次話はデュー視点でお送りしたいと思います。

喧騒と迷子（前書き）

前話のデュー視点と、ちょっと進みます。

喧騒と迷子

前もってカナタを問い詰めて聞き出した彼女の家名と、誰にも明かしたことのない、家族以外知るはずのない僕の本当の名。

きつとりがこの世界の人間だったなら、名を聞いて僕の正体に気づいていただろう。

しかし瑠璃は当然のように気づかない。
だからこれは神の采配なんだ。

姉上に自信があると言ったが、あんなものは嘘だ。
るりは、今まで見てきたどんな姫君より美しい。

何と言うか、儚げとは違うし、煌びやかというわけでもない。
可愛いというか、ずっと見ていて飽きないというか……。

僕が神だったら、彼女の時を止めて、そのまま手元において置
くだろうね。

同じことを、どれだけの男が考えるのか。
ぞっとする。

市場に連れ出せば、案の定彼女は注目の的になる。

背中に流れる美しい黒髪。

光の加減では黒に見える、黒に近い濃茶の瞳。

白い手足はほっそりとしていて、けれど抱き締めればきつと柔らかい。

何より、彼女の表情が、こんなにも周囲の目をひきつける。

泣きそうな顔をしていたかと思えば、いい匂いを嗅いで幸せそうな

顔になる。

通りの大道芸に口を開けて笑っていたかと思えば、不安そうに寄り添ってくる。

これは、しばらく外出禁止にしよう。もう決めた。

だけどその前に、「虫除け」を買わなければ。

姉上の作ったアクセサリーは繊細で可愛らしいが、明らかに特定の相手を意識していない意匠だ。

つまり、恋人も婚約者もないと触れ回るようなもの。

そんなもの付けさせて、僕が外に出すはずがないだろう？

やつと着いた店に、僕は心の中だけで溜息をついた。

ここに勤めている者は、僕の「本当の姿」を知っている。だが、ここしかない。

店に入ると店のものが総揃いで出迎えるから、るりがおかしな顔をした。

・・・とにかく、「虫除け」を選ばなければ。

るりが店の中でキョロキョロとして、こちらにあまり注意を向けていないのをいいことに、この店で最高級の石を持ってこさせる。

・・・っち、やはり石のまんまで、カットもされていない。るりには、どの石がいいか・・・。

カナタから聞き出した情報に寄れば、彼女の名前は宝石の名前だとか。

できれば「るり」という石を探してやりたいが、どんな物か分かる

はずもない。

嫌だったが、るりに「るり」の特徴を聞いた。

深い、青色の、石？

それは簡単に見つかった。

なぜなら絹の台座の上で、一番見やすい場所……つまり一番高価な場所に並べられていたから。

それに、この石は僕にも縁がある。

本当に、るりとの出会いは神の采配に思えてきた。
それか、神の悪戯のどちらかに。

「るり」の石を四つに分けてイヤリング、ネックレス、指輪に細工を依頼した。

あまり大粒だとおかしな輩に目を付けられかねないからね。
それに女性には一揃いあるのが、なかなか重宝すると聞く。

細工には一ヶ月掛かると聞き、眉を顰めた。

そんなに長い間一所には留まれないが……仕方ない。

どうせ時間が掛かるのならばと、指輪の裏には文字の彫りも依頼した。

モッソスの悪魔を壊滅させた時、家庭がある者や無理に留められていた者には、それなりの金銭を与えて逃がしたが、それ以外の財宝は全て僕が頂いてきた。

今回の細工にはその半分ほどの金を使うと聞いた。

庶民ならば三代に亘って遊んで暮らせるほどの金額だが、惜しんだりはしない。

とりあえず、今日のところはこれでいいだろう。

「さあるり、帰ろう」

「え、もういいの？」

「うん。用事はおしまい。どこか行きたい？」

なんて聞いても、るりには行きたい場所の想像もつかないだろうけどね。

「あの・・・大きな岩、ない？」

「・・・・・・・・」

大きな、岩？

ああ・・・大陸の秘境のどこかに巨大な一枚岩があると聞いたことがあったつけ。

でもなぜ、るりがそんなものの存在を知っているんだ？

それに、そんなもの見て面白いのだろうか・・・。

だから、ついあんな風に答えてしまった。

「ないよ」

「え・・・そーなの？」

「そう。ほら、夜の市場でも見に行こう」

「ふーん」

そして僕たちはすっかり日も暮れ、酔っ払いがあちこちに出現する夜の市場へと繰り出した。
さっさと仕立て屋に帰れば良かったのに。

それは、るりに両手で持って食べる「クレープ」とやらを買い与えた時。

食べ辛いと言うので、仕方なく手を放していたんだ。

「るり、そろそろ帰ろ・・・」

確かに、いたはずなのに。

「るり!？」

るりは影も形もなく、まるで夜の闇に吸い込まれたかのように姿を消していた。

喧騒と迷子（後書き）

瑠璃はウル　を見てみたいです。

ちなみに登場人物はまだ誰も気づいていませんが、方向音痴です。

迷子と人攫い（前書き）

今回は痛い表現とお決まりの犯罪表現があります。
犯罪は絶対にいけません。

苦手な方はブラウザバックで。

迷子と人攫い

ひしめく屋台の中で、ひとつ眼を引くお店があった。
近づいて香りを嗅ぐと、懐かしい香りがした。

「おじさん、これ何ですか？」

「イコの実を水に浸した後、蒸して団子にしたもんさ。味見してお行き」

「わあ、ありがとうございます！」

屋台の気の良さそうなおじさんがくれたのは、まさしく「おにぎり」だ。

彼方め、こんな近くに売ってるのに今まで気づかなかったなんて、おっちょこちょいは相変わらずだね。

「いったただつきまーす」

口に頬張ればそれは願い続けたお米の味。ああ至福！

「デューも食べてみて、すっごくおいし……い？」

「……あれ？ あれれ？ デューってば、私が目を離した隙にどこへ行ったんだろう。」

クレープ食べるために手を放したのがいけなかった。
探してから帰らないと、ウェリーナ様が心配するよね。

「おじさん、これ二人前・・・じゃない、三人前下さい！」

「全部で6シテルだよ」

えへへ。こんな時の為に、デューから少しお小遣いを貰っておいたのですよ。

彼方とウェリーナ様にお土産できて良かった。

・・・迷子君のデューにも、仕方ないからあげよう。

「お嬢ちゃん一人かい？ この辺では見ない顔だね」

屋台のおじさんがおにぎりを包んでくれている間に、私は目だけでデューを探していた。

その視線が気になったのだろう。ただのお客さんにこんな心遣いしてくれるなんて、いいお店だ。

「ううん、はぐれちゃったの」

この辺の人間か否かは、濁して答えた。

「そりゃいけない。ここから3軒ほど先の屋台で砂糖菓子売ってるんだよ。その裏に路地があつて、抜けたら軍の駐在所がある。こんな物騒なとこ一人で歩くより、駐在所に連れが迎えに来るのを待ったほうがいいぜ」

軍の駐在所・・・私の世界での交番みたいなものだろう。

前にデューから、この世界ではほとんどの国で軍が警察や消防・救急のような役目を負っていると聞いていたから。

「はい！ おじさんありがとう」

「気をつけてお行き。まだこの町にின்なら鼻屑にしておくれ」

「はい」

なんて親切な人だったんだろう。鼻屑にします、しますとも！

おじさんに教わったとおりに砂糖菓子の店まで行き、その裏の路地に入った。

少し遠いが、出口辺りで光っているのが駐在所だろう。

（おにぎり、冷めないといいけど）

何せこの世界には電子レンジなんてないので、冷えたら美味しさが半減だ。

冷えないように腕に抱え込み、丁度路地の入り口と出口の真ん中辺りに差し掛かったときだった。

前から路地がぎりぎり通れるほど体の大きなお兄さんが二人くらい、こちらに歩いてきたのだ。

勿論このままではお互い通せんぼ状態になってしまっだろう。仕方なく引き返そうと、後ろを向いた。

しかしそこにもゴリマッチョなお兄さんが蓋をするように、道を塞いでいた。

……あれ？

距離はすぐにつまり、私はお兄さんたちに挟まれる格好となつてしまった。

……なんでニヤニヤしてるんですか？ お兄さんたち。

「見かけねえ顔だ」

「大陸の人間じゃねえな」

「ま、上玉に越したことはねえ。お嬢さん、痛いのは好きか？」

「・・・痛いの好きって、マゾでしょ。」

好きなわけではない。つまり嫌い。

声が出なかったので首を左右に振れば、お兄さんの一人が「そうだよなあ」と頭を撫でてきた。

あれ、なんかいい人かも。

「だいじょーぶだいじょーぶ、安心しな。あんたみたいな上玉に傷付けちゃあ、市での値が下がる。俺たちや売りもんには手を出さない主義だ」

「売りもん？」

やっと出た声は少し擦れていた。売りもん？ 市？

あー嫌な予感がしてきましたよ、びしびしと。

「ああ、闇市で最高のオークションにかけてやるから、安心しな。買い手は大抵品の良い豪商か、お貴族様だからな。・・・趣味が良いとは言いきれないがよ」

だから行こう、見たいなさわやか顔で手を引かれるけど、これって人攫いだよね？

それに闇市って、オークションって、要するに人身売買でしょ！

いい人なんて冗談じゃない！ 犯罪じゃん！

「いや！ 放して！」

「今更抵抗かよ！ 頭の悪いお嬢さんだな」

「やめてっ……うつ！？」

頭に、強い、衝撃。

そのまま倒れたのか、どうなったのか分からないけれど、お兄さんたちの声が遠くで響いた。

馬鹿やろう傷つけんじゃねえ！

すいやせん兄貴！ だけど薬が切れちまって……

うち、とにかく人目につかない内に運べ！

はいつ……ってなんだこいつ！ 体が……！？

うわああ！ 兄貴！

くそ！ 軍か！

時折光る線に、怯えたような声と、遠くに消えていく足音。

体が何度か宙に浮かび、その分何かに叩きつけられ、強い圧迫を受けた。

苦しい。痛い。熱い。寒い。

正直、死んだと思ったくらいに。

あの極寒の海に放り出された時と同じくらいの苦しみに、今度こそ死ぬのだと思った。

そのまま、あの時のように深い闇に意識が沈んでいくのを、ただ感じていた。

迷子と人攫い（後書き）

るりちゃんぴーんち。です。

夢見（前書き）

やや核心に触れ始めます。

今回は一つ一つの文が短くて、読みずらいかもしれませんが、読みずらかったら、申し訳ありません。

夢見

真つ暗で何も見えない。

違う、見る能力を奪われたように、一切の光が感じられない。

どこからか楽しげな歌声が、私を包む。

黒き瞳は太陽の人、太陽の人はあたたかき人
黄金瞳はつきの人、つきの方は優しき人

何？ 子供、の声……。
声ははしやぎながら、こちらへ向っているようだ。

黒き瞳に金色の、小麦の大地にあたたかき、我らが女神、いざ
歌え

黄金瞳に闇色の、豊饒の海になみだふる、我らが女神、いざ謡
え……

ふつと意識が浮上し、視界が開ける。

『あ……』

『おきたー』

『おきたー』

『さなあ、るなあ、おきたよー』

『おはようー』

『お、おは、よう？』

開いた視界に真っ先に飛び込んできたのは小さな子供たちだった。
いちにい・・・六人？

どの子も将来が怖くなるくらいの可愛さだ。

次いで確認できたのは、今いる場所が先が見えないほど広い、真っ白な空間であること。

『るりーあそんでー』

『るりー花つみしよー』

『るりー』

『るりー』

そしてどの子も、私を「るり」と呼んで、ぴつたりと張り付いている。

可愛い。少しくらいなら、遊んだって大丈夫だよな。

『じゃあみんなで遊ぼ。なにする？』

『かくれんぼ！』

子供たちがいつせいかくれんぼを強請った。そして何となく私が鬼になってしまった。

でもこんな真っ白な空間に隠れるところなんて無いだろう、と思ったら、そこはあっという間にたくさんの人が行き交う市場となった。

『じゃあ隠れてね、十数えてる間にね』

そして私は十を数え始めた。

『いち・・・・・・・・』

だけどここは何処だろう。

『にーい・・・・・・・・』

確かこの場所を歩いた気がするんだけど。

『さーん・・・・・・・・』

それで、私はどうしたんだっけ？

『しい・・・・・・・・』

「るり！！」

あれ？

私の、名前を呼ぶあの人は、見覚えがある。確か・・・・・・・・。

『・・・・・・・・デュー？』

息を切らせて。

大声を上げて。

汗びっしょりになって。

・・・そんなに一生懸命、誰を探してるの？

「るり！」

・・・ああ、私か。

でも、何でそんなに一生懸命探すの？

そんなに、大切なの？

「なあ、黒髪の、黒い目の・・・若草色の服を着た女の子を見なかったか」

「ああ、その子ならその、ほら細い路地に入ってたよ」

「ありがとう」

デューは路地に駆け出す。あ、止まった。
地面を見て、固まっている。

「るりっ・・・！」

ぎゅっと拳を握り締めた。・・・そんなに握ったら、爪が掌に食い込んでくやうよ？

肩が震えてる・・・泣いてるの？

『るり』

突然声を掛けられて、びっくりと体が跳ね上がった。

『あ・・・』

水色の髪の子が私の服の裾を引っ張っていた。不服そうな顔を
して。

『忘れてた？　かくれんぼのこと』

『ごめんなさい。ちょっと、懐かしい人がいて・・・』

懐かしい？　・・・誰を？

いけない、また何もかも忘れそうになる。

何だろう、頭に霧がかかっていくみたいで、凄く怖い。

『るり、もう帰るの？』

『ずっといて、ずっと遊んでよ』

うん、そうしてあげる。

・・・その言葉は、喉まで出掛かって、止まってしまった。

『僕たち、るりが、るりがいなきゃ・・・！』

『消えちゃうよ・・・』

・・・何だろう。この子達の様子。尋常じゃ、ない？

『大丈夫だよ、ずっと一緒だから・・・』

でも。

『私、あの人のところに一度、行ってくる。大丈夫だよ、戻ってく

るから』

なぜだかそれができると確信して話していた。

『ほんと・・・？』

『うん』

ここにどうやってきたか分からないけど・・・何となく、また来れる気がするから。
きっと大丈夫。

『るり、僕たちのこと、忘れないでね』

『きつとだよ、お願いね』

『るり、これもってって』

『え？ あ、ありがとう・・・でもいいの？』

掌の上に乘せられたそれを見れば、小さいがとても綺麗な石だった。卵のように白くて、すべすべしている。

『じゃあ・・・』

そう言うと、子供たちは笑いながら手を振って、消えてしまった。

私も、戻ろう。

きっとまだ泣いてる。

魔法使い（前書き）

これでやっとキャラが出揃います。
・・・今回のですけど。

魔法使い

帰るから。もうすぐ貴方のところへ帰るから。

だから、泣かないで。

ずっと、
るから。

目が覚めて最初に気づいたのは容赦なく私を襲う全身の痛み。
痛みから逃れようとわずかに体を動かすけど、激痛が電流のように
走ってそれも叶わない。

何でこんなに痛いんだろう。

もしかして、今までのことが全部夢だったなんて、そんなの無しだ
よね？

嫌だ。

「
から、・・・を」

ん？ 人の声がする。デューの声、ではない。

「・・・だ、いいか」

あーよく聞こえないや。でも感じからして違う部屋っぽい。

声が聞こえていたほうから扉が閉まる音がし、次いでこちらへ向う足音がした。

扉が開く音がしたから、多分誰が入ってきたのだろうけど、首も動かせられないのだから確認のしようがない。

「起きたか」

うつわ、超美声。

姿が見えないから、全てを声で判断するしかない。

声も、出そうとしたけれどぐもって音にならない。

今更気づいたけど、私の顔や体には包帯らしきものが巻かれているみたいだ。

……そんな重症なの？

「……ああ、包帯か」

何かを悟った手は、多分顔だと思われる部分に触れる。

そして顔を覆っていた包帯らしきものをゆっくりと剥がされた。

うつわ、光が眩しいい。

まだちかちかする。眩しすぎて周りの状況もさっぱりだ。

「まだ目は開けるな」

誰だか知らないけど、それを先に言え！

ようやくと目が慣れた頃に、また仰天した。

この世界で初めてデューと同等か、それ以上の美形というものを目にしました。はい。

白銀の髪ですよ、白銀。

しかも目は紫って。完璧じゃないですか。

・・・別に面食いではないけれど。断じて。

「あの、えーと・・・」

こういう時って何から訊けばいいんだろう。

何でこんな重傷を負ってるんですか？

貴方が助けてくれたんですか？

ところで貴方は誰ですか？

ここって病院ですか？

私・・・いつ帰れますか？

「・・・お前は路地裏で人攫いに襲われていた。私はそれを見て魔術を放ち、お前を巻き込んで重傷を負わせた。とりあえず私の屋敷に運び手当てをした。その傷ではしばらく起き上がることもできないだろうから、しばらく帰れないだろう。 こんなところか」

ひいひい エスパー！？ 心読んだの？！

「・・・顔に出ている」

呆れたような溜息をつく美形がむかつく。

しかも話を聞けば直接的な怪我の原因はこの美形だし。

・・・かえりたーい。

「じゃあ・・・心配してると思うので連絡だけしたいのですが」

何か変な夢見ちゃったし・・・別に、デューが泣いてるからどうとかじゃないんだけど。

「どの辺りの区画に住んでいるのだ。電報を打とう」

「え、区画？」

しまった。ここにはメールも電話もないんだった。

連絡するには徒歩で向うか・・・電報のようなものを「住所」に送らなければならぬ。

区画なんて知ってるわけがない。

胡乱げな眼差しを向けられる。まるで頭のおかしな人間でも見るみたいだ。

「旅人か・・・それにしても宿屋の場所くらい、どの区画か覚えておくのは常識であろう」

ううっ。

だってーいつもデューと一緒にだったし・・・。

そうだ！ ウェリーナ様の仕立て屋の場所を言えばいいじゃない！

「北！ 町の北にある仕立て屋さんに連れがいるんです！」

ううっ連れって言うの恥ずかしい。

でもパートナー？ 相棒？・・・違う気がするし。

「町の北区はここだ。しかもこの辺りに仕立て屋などない」

えー……。

どーしてー……？

美形は「こいつどうしようもない」とでも言いたげな視線を向けてくる。い、いたい。

「……明日軍に失踪者の届けが無いか見てくる」

「すみません……」

何で謝ってるんだろう、わたし。
もう帰りたーい。

これ程デューに会いたいと思うことは後にも先にもこれっきりだろ
う。

……これっきりだと思いたい。

「で、連れとやらの名前は」

それぐらい分かるんだろうな。

とは言わないが、美形の鋭い目がそう語っていた。間違いなく。

えっと……長い名前は、覚えてないけど。

「デュファンス」

「……何だと」

ひいつー！！

魔王だ、この人ただの美形じゃなくて魔王だ！
冷酷の魔王様なんだ！

「・・・っち」

もうやだーコワイー美形コワイー。

「出かける・・・寝ている」

はい寝てます寝てますだから殺さないで下さい。

美形は乱暴に部屋から出て行き、そして乱暴に扉を閉めた。

痛いしコワイし、はやくおうちに帰りたいよー・・・ぐすん。

世界

魔王が出て行った後すぐ、私はやっぱり小さくなってしまった。牛乳の効果が切れたのだろう。

そしてやっぱりセーラー服着用、ですか。

・・・それにしてもあの魔王、なんでデュファンスって言ったらあんな反応したんだろう。

それに魔法使ったって言うてたよね。じゃあ魔法使いか。

あれ、魔法使いつて最近話題に出てきた気がする。いつだっけ。

ああそうだ。デューがウェリーナ様と話してたんだ。

えーと私の体が小さいことで、魔法を掛けられているんじゃないかと相談に行くって・・・。

「なんて名前だっけ」

うんうん悩んでいるうちに、体が疲れを訴え始めて、私はいつの間にか眠ってしまった。

起きた時この姿を魔王に見られたらどうなるかなんて、考えもせず。

そしてまた、不思議な感覚に陥る。

体は青い空の中に浮いていて、見下ろした風景は懐かしい世界だった。

日本・・・唯一の、故郷。

『あれ、夢・・・にしてはリアルー』

胸がドキドキと高鳴って、体は、というより目線はどんどん見知った町に近づく。
やがて静かな、はっきり言えばやや廃れた懐かしい町の商店街へと、私は降り立った。

『夢、・・・だよ』

それにしても人の息遣いや流れる風景が、まるで本物のようだ。
なぜか、怖いと思った。

なぜだろう。ここは、私が生まれ育った町なのに・・・。

その時お魚屋さんの旦那さんと、住んでた家の隣のおばさんが立ち話をしているのを耳にした。

「・・・だそうよ」

「可哀相にねえ、旦那さんも奥さんも。彼方君はまだ眠ったまんまだし」

「お姉ちゃんも、せめて遺体だけでも引きあげれば良かったのに」
なに？

何を話してるの？

彼方が、眠ったまま？
違うよ、彼方は、彼方はこっちの世界にいるんだもの。
私と一緒にいるんだよ。

「あれからもう一年だろ」

一年？

私がこの世界に来て、まだ半月しか経っていないはず。
なのにあの事故から、一年も経ったって言うの？

「まだ生きてるかもしれないって、しばらくは行方不明で届け出る
みたいけど」

「海難事故の行方不明で生きてる奴なんか・・・」

「瑠璃ちゃん、かなづちだったものね」

私・・・？

「奥さんは心を病んで寝たきりになっちまったし、旦那さんも頑張
ってるがなあ」

「せめて彼方君の目が覚めてくれれば、奥さんも良くなるんだろう
けどね」

お母さん、具合悪いの？

お父さんも・・・なの？

「全く、海外旅行なんてするもんじゃないね」

アメリカへ、二週間の家族旅行をしに行こうって言ったのは、私。
あの船に乗りたいてって言ったのも、私。

お母さんが寝たきりなのも、私のせい。
お父さんが辛いのも、私のせい。

彼方が、眠ったままなもの、私のせい。

懐かしいはずの場所が、いつの間にか私を責めている。

これは夢じゃない。

ここは現実の、私の世界だった場所だ。

何もかも、起こっていることは、きっと正しいんだ。

だから、この世界に、私はいない。

いくら海の底をさらったって、私はきつと出てきやしない。

お母さんとお父さんがいくら待ったって、私の「遺体」は一生上がってこない。

やっとわかった。

彼方が私より、一年も先にこの世界にいた理由。

彼方は元の世界で眠ったまま、まだ生きているから元の世界での時を刻んでいる。

だから、一年。

私はもう、元の世界にはいない。

だから、半月。

彼方は、まだ帰れる。

私は、……もう、帰れない。

世界（後書き）

これにて第二部、またの名を異世界順応編が終わりです。
続きまして第三部です。

抱擁（前書き）

ここから第三部です。またの名を異世界真相編です。
ちよつと短いです。

抱擁

目が覚めた。

同時に胸の中が熱くなって、どうしても心細くなって、気づけば泣いていた。

私はどうしてこの世界に来たんだろう。

どうして彼方もこの世界にいるんだろう。

彼方は元の世界でまだ生きているのに、何で私はそうじゃないの。

どうして私は小さくなるの。

どうして。

どうして。

「……るり」

するはずのない声に振り向けば、いるはずのない人がいた。

いつ来たの。どうしてここが分かったの。

そんなもの、どうでも良くなった。

これが夢の続きでも、構わない。

「デューっ………！」

抱き上げられたまま、すがり付いて泣いた。

小さくても、大きくても、この手はいつも抱き締めてくれる。

「どうしたの？ 怖い夢でも見たの？ それともどこか痛い？」

「ふ、うえっ、でゅ」

「大丈夫だよ、僕がいるでしょ？ ほらね」

ぎゅっと強く抱き締めしてくれるから、苦しいくらい想ってくれるから。

また胸が熱くなる。

「デューっ、デュー……」

この手が届くところにずっと居たい。

どうして今まで気づかなかったの。

この手はこんなにも、優しくてあったかい。

デューがいてくれて、良かった。

デューがいなかったら、今頃私は壊れていた。
きつと。

どれくらい泣いたのかわからないけど、気づいたら大きくなっていた。

裸にシーツを撒きつけただけのあられもない姿で、檻に閉じ込められるように抱かれていた。

「おはよう、るり」

言葉と一緒に唇が降りてきた。
小さなリップ音で固まりかけていた思考が動き出す。

「え？ デュー？」

「ん？」

「何で私おっきいの？」

「可愛かったら、牛乳飲ませてみたんだよ」

「……………」

飲ませたって…………どうやってかは心臓に悪いので聞かないことにしよう。

「それより、るり……………どうしてメサファの所に居るのか、説明してくれるよねえ」

「…………メサファ？」

誰それ。

「誰それ。　　みたいな顔だねえ」

くすくす笑いながらさり気無く腰を撫でる手つきが怪しい。

「　　勝手に居なくなるし、人売りに引っかかるし、おまけに怪我までしてるみたいだし？」

「ひゃっ」

耳の裏をべろってされた。べろって！

「怪我が治ったらお仕置きだね。．．．ふふふ」

嫌です。

そう言えたら、どんなに良いか。

「それにしても、びっくりしたよ。．．．あんなに泣いてる君は、初めて見た」

そのいつにない真剣な眼差しに、どきりとする。

「どうして泣いてたの？」

問い質すほどの強さはないのに、デューの目を見てみると、何もかも話したくなる。そして、話した。

不思議な二回の夢のこと。

話すうちにデューの顔つきがどんどん険しくなっていた。

「．．．これで全部」

話し終えたときにはもうどんな子供も泣き出すほど、恐ろしい形相になっていた。

「そう」

コワイです。

何でそんなにコワイのか、訊く事さえできないくらいに。

静まり返った部屋に扉を叩く音が響くまで、デューは一言も発しなかった。

抱擁（後書き）

瑠璃がとうとう自覚しました。

疑問符

部屋に入ってきたのは銀髪魔王だった。

手に包帯と木の箱を持って、むっすりとした顔で一体どうしたのか。

「包帯巻くなら僕がやる。ちょうだい」

ちょうだい、なんて可愛く聞こえるけど威圧感がバリバリなデュー。

「私は医者でもある。患者を診るのが役目だ」

正しいこと言ってるけど原因貴方ですよ、な魔王様。

目の前に魔王様、背後にデュー。

前門の虎、後門の狼みたいな。

あれ、意味なんだっけ。

「るりに触れるなんて、許すと思うの」

あのう、そこで戦争勃発するの止めてもらえますかね。

とりあえず私、横になりたかったりします。

いやデューの胸板も気持ちいいですけど。

「・・・いいだろう。だがその前に話がある」

「奇遇だね。僕もお前に訊きたいことがある」

バチバチ火花を散らしながらデューは腰を撫でるのをやめないし、魔王様の視線は痛いし。

おかげで悲しいのがどこかに吹っ飛んじやった。

二人はしばらく発言権で争っていたみたいだけど、どうやらデューは包帯の代わりに譲ったらしい。

「まず・・・その娘の身元について訊きたい」

「僕の婚約者。以上」

待て待て待て！ 勝手に何を！

私の吹き出る冷や汗に二人は気づいていないのか、気づかない振りをしているのか。

とにかくこの場は完全に無視されそうな予感がする・・・すごく。

「小さくなるのをこの目で見た。どういった体質だ」

「それは僕の質問だ。この子に魔法が掛けられているなら、解け」

「魔法だと？ そんなものは微塵も感じられんが」

「じゃあどうして普通の人間が小さくなる？ 魔法以外でこんなことが出来るって言うの？」

「・・・無いことは、無いだろう」

自分が話題になるって、なんだか照れくさい。

ああそんなこと言ってる場合じゃないよね。

でも今さり気無く「魔法じゃない」って言われたよね？

魔法じゃないなら、やっぱり私が異世界人だから？

でも彼方は小さくならないしな！。

部屋を覆う沈黙の中、デューが息を呑んだ気配がした。

「まさか」

「・・・一番心当たりがあるのではないか」

デューが私を、今にも零れ落ちそうなほど開いた目で見た。

「るりが・・・そんな、まさか」

おい本人に分かるように話して下さい。

「文書を確認したことが無いのか」

文書？ 秘密チックな響きがする。

「くそっ」

デューには珍しい乱暴な言葉遣いにドキドキしながら、また汗が流れてきた。
緊張して。

そんな私の様子に気づいたらしく、デューは腰に置いていた手で私の髪をすくように撫でた。

「大丈夫だよ」

「・・・そう？」

「ああ。まあ、少し面倒になりそうだけど」

面倒ごとは嫌いだけど、デューが大丈夫と言っなら今は信じるしかない。

「とにかく確証が必要だ」

「そうだね・・・だけど可能性がある以上、一所に長くは居れないな」

「え？」

ひとところに長くは居れないって、もしかして仕立て屋に・・・帰れないってこと？

そう訊けばデューは困ったような顔をした。

「うん・・・あそこは駐在所にも近いし、今は皇国に関する場所には近寄らないほうがいい。それに姉上もあまり軍部に存在を知られないほうがいいから」

つまり、仕立て屋に居るとウェリーナ様に迷惑が掛かるんだろう。どうしてかは分からないけど。

あれ？ 今デュー、皇国って言った？

それってーアルナディア皇国のことでしょ。他に皇国はないって聞いたもの。

・・・解らないことが多くて、頭がパンクしそう。

それを見かねて、魔王様が溜息をおつきになる。

「とにかく、その娘の怪我を治すことが先決だ。確認と逃亡はそれからでもいいだろう」

確認と、逃亡。

そんな不穏な言葉を、昨日の晩御飯のメニュー言つみたいにあつさり言わないで欲しい。

「とりあえず籠城、ね。僕は先陣で切り捨てるのが好きなんだけど」

ああ、こっちの方が不穏でした。

戦線離脱していいでしょうか・・・。

それから二週間ほど、私は居心地が悪すぎる環境で怪我を治すことに専念した。

不穏な会話の内容も、「まあいつか」でとりあえず保留と頭を切り替えて。

デューも魔王様も時々出掛けていたけど、どんな時も決して一人にはしてくれなかった。

起きてる時も寝てる時も、着替えの時もお風呂の時も。

そして私は誓いました。二度と病氣も怪我もしてたまるか、と。

看病してくれるのは嬉しい。体動かないし。

だけど、嬉々として着替えやお風呂を手伝わなくてもいいと思う。

それもために。

・・・体が綺麗なのは、嬉しいけども。

しかもデューなら分かるけど、なにゆえ魔王様まで率先してやろうとするのか全く理解できなかった。

二週間の間、私の食事介助（餌付け）と着替え介助（着せ替え）は二人が交替でしてくれました。

ただ、添い寝だけはデューが絶対に譲らなかった。

とにかく泣きたくなるような二週間は何事も無く過ぎました。

そしてやっと歩けるまで体が回復したところで嵐はやってきた。

疑問符（後書き）

メサファ君で短編書きたくてうずうずしています。

襲来（前書き）

ちよつとオカルト（？）入ってます。
長いので、分けさせて頂きます。

襲来

まさに、彼らは嵐のようにやってきた。

私はといえば喜ぶことも俛ならず、複雑な心境でいた。

前の世界に居た頃、「人ならざるもの」が見える友人に、教えてもらったことがある。

「人ならざるもの」やそういった類の出来事に遭遇した時は、決まって全てが終わって過ぎ去ったと思った頃に、やっと全貌が見えるのだと。

まるで膨大なピースを見せられた後、完成したパズルを見せられるように。

辻褃は、終わった後に合わせられる。

「るり、口を開けてね」

「・・・デュー。私、もう一人でご飯くらい食べれますよ?」

「何か言った? ほら、冷めちゃうよー」

どうやら聞く気がないらしい。同じくらい諦める気も。

でもデューへの気持ちに気付いた後だと、何となく拒否しづらい。まだ、打ち明けてないけど。

だって、好きだなんて言ったら、絶対酷い目に会っに違いない。
気持ちに通じてない内から、あんな事やこんな事をしても気にしな
い人だもの。

・・・うん。まだ、内緒にしよう。

仕方なく口を開け、雛鳥が親にされるように餌付けを受けていると、
銀髪魔王様が呆れたように溜息をこぼした。
ちなみにこの人がメサファらしい。

涼しい顔をしておきながら私の意識がない間、服を脱がせて包帯を
巻いていたのだから、さすがデューの知り合いだと思った。

その事実を知った時のデューの激昂ぶりには驚いたけど。

「いつも貴様はそうなのか」

「未来の夫だからね。当然のことだよ」

・・・否定しなきゃいけないのは解ってるんだけど。
いや、好きだから全部否定するのもあれだしなあと思うけど。

・・・複雑。

「どうだかな」

だから、なにゆえ魔王様もこの変態を焚き付ける様な言い方をする
のでしょうか。

その尻拭いも流れ弾も全部私なんですよ？

「これだから、魔術師と言うのは粘着で嫌いなんだよね」

「貴様に粘着扱いされるとは。私の修行が足りないのか、貴様の見る目がないのか」

「前者じゃない？」

「ふつやはり後者のようだ」

火花バチバチ。もう見慣れましたとも。

あの一どうでもいいのでーご飯食べたいですー。

お粥は冷めると美味しくないんですー。

その時仲裁に入るかのようなベルの音がした。

誰だかわかんないけど、グッジョブ。ナイスアシスト。

魔王様はデューをひと睨みすると、こちらの部屋に続く扉を閉め来客に応じた。

私とデューはここに潜伏中らしいので、人目に触れないようにしている。

横になったままの私の頬を、デューの長い指が労わる様に伝う。

これは好きなの。

「るり」

「・・・はい」

やばい、うとうとしてた。

デューも呼びかけられて覚醒した私に気づいたらしく、柔らかに微笑んだ。

「ごめん。眠い？」

「うつん・・・気持ち、よくて」

なんだかそれだけの言葉が恥ずかしい。うつん。
意識すればするほど、デューが私に向けているものに気づいてしま
う。

目線、労わり、気遣い、言葉・・・それに、愛情。

今まで良く気づかなかったものと、前までの自分に呆れてしまう
ほど。

この人は、私をずっと包んでいる。

「口付けていい？」

「え・・・あつ・・・」

デューは綺麗。だけど、やっぱり男の人で。

黒い髪も、水色の瞳も、バランスよく配置された目鼻も。

それに最近大きい姿で抱き上げられることが多くて分かったけど、
筋肉質だ。

筋肉隆隆ではないけど、やっぱり剣を扱う体をしている。
大きな手も、少しひんやりしてて。

「ん、うつん・・・」

「言ったよね、鼻で息して？って」

「だ・・・て・・・」

いきなりキスをするほうが悪いでしょう。
デューがくすりと笑う気配がした。

「お仕置き」

「へ？・・・ひゃんっ」

首筋にちくりとした痛みが走る。

「くくデューっ！」

「ね、るり・・・どうしてさっき、否定しなかったの？」

「ひ、てい？」

もぞもぞと体を這う少し冷たい手に、お腹の奥がきゅんとした。
ちよっと待って、まだお日様高いんですが。

「未来の夫」

「そ、それは・・・」

確かに、前までは否定していた。

「・・・教えて」

そう、耳朶に触れるか触れないかの場所で囁かれて。

もう、ダメだ。

「それ、は……私が……」

デューの瞳の奥にわずかな炎を見つけながら、話し出したその時扉が勢いよく開かれた。

「リュイっ!!」

「デュファンス!？」

勢いよく飛んできたそれをかわし、デューは不機嫌そうに鼻を鳴らした。

「……生きてたんだ」

「離れろ! リュイから離れろ!」

飛んできたそれ……ギラリと光る剣から聞き覚えのある声に目を向けた。

「……ある、しふぁー?」

間違いない。

何でここに?

何で怒ってるの？

疑問が頭をめぐる。けれど解けそうにない。

アルシファーは私を見て、怒りで紅くさせていた顔を更に紅くさせた。

「リユイ・・・遅くなったけど、助けに来たよ」

そしてまたデューに射るような視線を向ける。

分からない。

アルシファーがここに来た理由も、怒る理由も。

彼が、私を何から助けようとしているのかも。

そして、懐かしい人に会えて嬉しく思わない自分も。

全て分からなかった。

唯一つ分かったのは、これから何かが起こるということだけだった。

襲来（後書き）

再登場チームは、やや遅れをとってる感があります。
お気に入り登録が増えて嬉しいです。

しかしスランプから抜けられない（汗）

もう少しスピードアップの為に、頑張ります。

襲来2（前書き）

このたび被災された皆様に、心よりお見舞い申し上げます。
これからシリアスな部分を書いてしまうかもしれませんが、ご不快
に思った方はお許し下さい。

襲来2

驚いた時つて、ほんとに人間何もできなくなるらしい。
私はただ呆然と、よく分からないままそこにいた。

とりあえず、アルシファーが投げた剣を引き抜いたデューが、それを投げ返したのはわかった。

「物騒なものを投げるな。　僕のるりに当たったらどうしてくれる・
・・・？」

「リュイに当たるはずが無いだろう。俺はあんたを狙ったんだから
な」

「へえ？　ルナ・メール号の船長は失業して賞金稼ぎにでも転職したのかい」

「そつちこそ、罪も無い人間から集めた金でこんな遠くまでリュイを連れて来て、何をしてるんだ？」

「・・・とりあえず、アルシファーってこんなに黒いキャラだったかな・・・と思った。

デューが黒いのは知ってるんだけど、アルシファーは何かこう、もつと清潔なイメージだったから。

そう、彼はイメージしかない。

アルシファーとは、ほんの一日かそこいらしか一緒にいなかったん

だから。

とりあえず、何をしに来たんだろう？

敵討ち？ まさかねー。とにかく聞いてみようかな。

「ねえ、あるしふぁー」

「！ リユイツ・・・お前、その怪我は！？」

「あ、大丈夫大丈夫、もう治りかけだから・・・それよりね」

「こんな怪我までさせられてっ・・・俺たちが助けに来たからもう大丈夫だぞ」

あれーその台詞どっかで聞いたなー？

「あのね、あるしふぁ・・・」

「マリスも、お前に会いたがってる。迎えに来たんだ帰ろう」

「迎え・・・」

はい？ 今、アルシファーは何て言ったの？
ムカエニキタンダカエロウ。

「負け犬が・・・いや、皇国の犬か？」

「なっ！」

不適に笑うデューは怖いけど、ちょっとかっこいいかなーと思ってしまった。

アルシファーには悪いけど、私は・・・傍にいたい。

それに皇国の犬なんて、どういうことだろう。

デューは、一体何を知っているの？

「そろそろ追っ手をくつつけて、るりを助けるだと？ 滑稽だな。・

・・・お前達一体何をしに来た？」

冷たい言葉と共に空気が部屋を駆け抜けていく。

アルシファーとその後ろにいたらしいライズは真っ青だ。

「お前達がどうしてここに来たのか当ててやろうか？ お前達はるりを売った代償にモッソスの悪魔に与えられた船でアルナディア皇国まで辿り着いた。だがそこであの大地震が起こり、メイルを扱う者として復興に借り出されていた・・・そうだな、お前達に目をつけたのはどうせ第2皇子だろう？ そして城に滞在するうちに、ある禁書を見てしまった」

禁書、という言葉にアルシファー達は顔を強張らせ、デューを凝視した。

「何故・・・そこまで」

「見くびられては困る」

いつのまにかデューの纏う雰囲気がいつもと違って、そう、ウェリーナ様とお話している時のようなものになっていた。
私の知らないデューに。

「字は読めたか？ 禁書の文字は」

「いや・・・癖が強いのか、解読までは」

「・・・だが、挿絵だけで大体分かったのだろう？」

「あ、ああ・・・」

アルシファーとの受け答えで、デューの顔はより一層暗くなっていた。
った。

「それはな、代々アルナディアの皇帝にのみ受け継がれる皇家の秘宝だ。あの物欲の強い弟が何より求め、・・・僕が何より拒否したものだ」

「デュー・・・？」

デューの目はもう疲れきっているようで、あまりにも悲壮な雰囲気だったから。
しばらく視線を落とし、何かを考えているようで誰も声を掛けられなかった。

「・・・るり」

「は、はいっ！」

「聞いて欲しいんだ」

「え・・・・・・？」

デューはいつかの朝のように、また私の前に膝をついた。
そこにはもう、いつものおかしな変態はいなかった。

そしてデューは話し始めた。

長い話の中で、私はある決意を固めた。

逃亡劇（前書き）

久しぶりで申し訳ありません。

逃亡劇

アスラ・トリーオ大陸を大きく横切る街道の名はベネル。

その街道を2台の馬車が走りすぎてゆく。

街道の傍で農地を耕す人々は顔を上げ、すぐに下げた。

貴族階級の馬車ならば這い蹲らなければならないが、どうやらただの旅人が商人らしい。

ならば仕事をしよう、そう思つて。

その粗末な馬車に、この世界で最も高貴な血筋に分類される男が乗っているとは、誰も分からなかっただろう。

「るり、辛い？」

「うん大丈夫」

「べたべた触るな！」

粗末な馬車の一台目に、私とデュー、それからアルシファーが乗っていた。

御者はライズだ。ライズは実にくじ運がなかった。

二台目には食料や旅に必要なあれこれに乗っていて、御者は魔王様が勤めている。

「お前こそべたべた触るな。いやらしい」

「いいいいやらしい！？　お、お前自分のことを棚に上げてっ」

「僕はるりの夫だ。触れて当然。お前はただの知り合いだ」

「誰が夫だ！　神の前で誓いでも立てたって言うのか！」

「神なんて役に立たないもの、僕が信じるわけ無いだろう」

「・・・一番くじ運悪いの私かな、なんて思っている。

アルシファーが魔王様の家に突撃してきたその日のうちに、私たちは逃亡することにした。

デューが話してくれたのだけど、予想通り彼は皇子様でした。

しかも大国アルナディアの、皇太子というやつでして。

ウェリーナ様は勿論皇女様です。それは似合うのでよし。

問題は何故私たちが追われているか、ということですが。

「デュー・・・」

「ん？」

蕩けるような笑みを私に向けなくて欲しい。ほら、アルシファーが仁王様の如くこっちを見てる。

あ、仁王様わからないか。

「彼方に、手紙書かなくて大丈夫だったのかな・・・」

「大丈夫だよ。姉上は分かってらっしゃるから」

「うん・・・そっか」

「そうだよ、心配しないでるりは休むんだ」

「リュイはとにかく怪我を治さなきゃな」

「黙れ賞金稼ぎ」

「あんたこそ黙れ海賊」

「・・・・・・」

まあいいや。ほつとこう。

どうして私たちが追われてるかと言えば、お話はデューが皇太子として皇国にいた時代にまで遡るらしい。

デューが皇太子だった時、同じく皇女様だったウェリーナ様に皇国の大貴族のお坊ちゃんから結婚の申込があつたそうなの。

けれどウェリーナ様はその大貴族と敵対する貴族のご子息と既に恋人でした。

勿論二人は最後まで抵抗したのだけれど、ウェリーナ様の恋人は敵方の貴族によって暗殺。

ウェリーナ様は無理やり結婚させられそうになりました。

デューと言えば、別に助ける気は無かつたらしいんだけど、ちょうどウェリーナ様の婚姻の夜騒ぎに乗じて家出をする予定だったの

だと言う。

そこでウェリーナ様は無理やりデューにくつついて、この大陸まで逃げてきました。

その後ウェリーナ様はあの町で仕立て屋をして、海賊になったデューと持ちつ持たれつ頑張っていたらしい。

それがデューが追われている一番の理由です。

もう一つは、私のセーラー服。

アルシファアたちが見たという禁書はまさに皇国の宝『ビート・メイル』の説明書。

そう、取扱説明書なんです。

このセーラー服は『ビート・メイル』という特別なメイルらしく、皇国の第2皇子様はこれが欲しいらしい。というか、これが無いと即位できないらしい。

そういうわけで、私たちはただいま絶賛逃亡中です。

「泊まるところが決まったら起こすからね」

「うん・・・」

デューは、私に打ち明けたあとここで別れても構わないと言った。自分といれば危険だし、『ビート・メイル』も自分が預かっていれば、私は狙われないからって。

でも、そんなの嫌だ。

もう決めたんだもの。

私は、彼と一緒に行くって。

逃亡劇（後書き）

短くてごめんなさい

街道の側で（前書き）

まさかの2ヶ月ぶり・・・ごめんなさいごめんなさい。

街道の側で

二台の荷馬車を走らせながら、デューとメサファは細かく連絡しあっていたらしい。

私たちはしばらく走り、開けた場所に今夜は泊まることになった。

私は焚き火にする枯れ枝を集め、魔王様ことメサファがなにやら魔法を使い、ライズが水を汲んだ。

アルシファードとデューは軽く狩りに出て、野うさぎが本日のメインディッシュとなった。

その夕食の最中だった。

「ベネル街道から外れる？」

「そう」

大きな街道は旅人にとって重要なことぐらい、私にも容易にわかった。

アルシファードもライズも不安げにしている。

「大きな街道はそれだけ人目につきやすい。かといってこそそこそ進んでも目立つ」

魔王様が兎の炙り焼きを頬張りながら仰った。

「あと一日くらい走ればそれなりの街が一つある。そこからはベネルを進まないで、中規模の街道を走ればいい」

「で、その後は？ デュー」

ちなみに私は大きくなっている。

セーラー服は見咎められたら困るので、とりあえず人前では着ないことにした。

かと言って、女性物も旅する上では目立つ。

なので今はデューの服を着ているのだ。

ちよつと大きいけど、前の世界でもジーパンとかはいてたから違和感はない。

ただ着た時のみんなの目が怖かったけど。

「るり、おべんとうがついてるよ。ほらここ……この大陸は狭いし、別の大陸に移るのが懸命ではあるけど……」

デューがそう言うと、魔王様もアルシファーもライズも唸った。

「……え、なに？」

言いにくそうな三人に代わり、ライズが話してくれた。

「リュイの世界では、大陸と大陸の移動には、何を使う？」

「えつとー飛行機か、船」

「ヒコウキ？ は判らないけど、こっちでは船なんだ」

船……そうだね、船しかないよね。

嫌だな。

思い出す。

「男ばかりだし、逃げ場はないし、不安要素が大きいんだよ」

「自分の船が持てたらいんだけどな……」

そう言えば魔王様以外はみんな元船乗りだもんね。

船の上なら無敵かな。

「でも乗っちゃえば追いかけれないよね？」

「そうだな」

とりあえず今日のところは、船の件は次の街で決めようと意見は一致した。

自分の船が持てるなら良し。

持てないようなら、乗る船は厳選したいということだった。

食べたものは、ライズが汲んできた水ですぐに洗った。
こうしないと野生動物が近寄ってきてしまうのだそうだ。

「るりはこっちで寝てね」

デューに案内されたのは馬車の中だった。

いいのかな。

そう思ったけど、現実的な話、私が一番お荷物で体力が無い。
デュー達は野宿も慣れていると言ってたから、素直に甘えよう。

「入り口の側にいつもいるから、大丈夫だよ」

それはアルシファー達が、ということじゃない。
追っ手や動物がということだ。

デュー達は、交代で眠るのだという。

なんだか色々申し訳ない。

「申し訳ないって顔してるねえ」

「・・・うん」

「僕はるりの夫だよ？ 妻を守るのは当たり前」

「・・・つつこみたい。」

「えっと、デュー？」

「メールの二人は自分で蒔いた種だし、メサファは興味があって見届けたいって言うから連れてきてあげたんだ。ね、気にする要素なんてないよ」

「……うん。」

守ってもらってるのに、こんなことで頭悩ませちゃダメだよな。

私もできることをしよう。

「デュー……あのね」

「ん？」

「……おやすみなさい」

「うん、おやすみ」

頭をゆったり撫でられて、私はあっさり眠りに落ちた。

言葉一つ、胸にしまって。

街道の側で（後書き）

短めですか？ ごめんなさい・・・

ラズ・ベネル

ラズ・ベネル。それは「ベネルの間」を意味している。

アスラ・トーリオ大陸を横断するベネル街道のほぼ真ん中に位置する古くからの商業都市である。

街道の真ん中と言っても港のある港湾都市でもあるので、この街から大陸中の物資が輸送される。

多くの人間が訪れる為警備も厳重であるのが特徴。

街はそれなりの高さのある城壁でぐるりと囲まれており、大門と貴賓門のみで通り抜けることができる。

大門は身分証明である「旅券」（パスポートみたいなもの）さえあれば、どんな人も通れるのだそう。ただし、列に並ばないといけないので少し時間が掛かってしまうらしい。

と、魔王様メサファがおっしゃってました。

えーっと、当然私は旅券なんて持ってないし、デューもあつたとしても出したりできないんじゃないかな。

「そんな街にどうやって入るの？」

「まあ見ている」

そして魔王様はすたすたと街に入る前の検閲待ちの行列の横を通り過ぎていった。

何処行くのかと思いつながら、みんな馬車二台を進ませついで行く。

すると魔王様は行列が見えるか見えないか、という位置まで来ると、城壁にぽつんと見える小さな門にいる門兵に向って行った。

「ここは高貴なご身分の方のみが通れる貴賓門。見たところただの旅人のようですが、門をお間違えではないか」

よく見れば門は小さくても馬車一台分は通れるようになっていなるほど、偉い人は並ばずにこっちから入れるって訳か。

魔王様はなにやらごそごそと荷物を探ると、小さな手帳を出した。黒い皮製の手帳だ。なんかゴツイ。ぺらつとめくって門兵に見せれば、彼はたちまち顔を青くさせた。

「ひっ……！」

「よいか」

「大変失礼致しました！　いかようにもご処分を！」

門兵は土下座の勢いで謝り始めた。ええ、何が起こったの？

「構わん。それより先を急ぐ。それと隠密ゆえ、我々が通った事は内密にするように」

「は！　かしこまりました！」

そしてガラガラと門を潜り、あっさり街へ入ることができました。

あのー、なんで？

デューが私の髪を結い上げながら説明し始めた。

「メサファは永久魔術師なんだよ」

「なんですか、それ」

「全ての国と地域で同等の待遇を約束された、魔術師の最高位だ。アルナディア王国なら公爵家と同じくらいの権限は持てる。政治には介入できないけどね」

「へー」

「その代わり入国したら、その国に滞在する間は全ての依頼を受けないといけないんだ」

「だから隠密？」

「そうだよ。るりは賢いね」

はいできた、と手鏡を持たされた。どうやらお団子にして結い上げてくれたらしい。

そして次に赤頭巾ちゃんみたいな被り物を付けられる。暑苦しい。

「黒髪は目立つ。ちょっと我慢してね」

デューだって黒髪なのに、どうするんだろう。
じっと見つめると、ごそごそと何かを取り出した。
金髪のかつらだ。

「ま、僕はこれで十分だから」

デューの言葉は私の耳には入ってこなかった。
だって、デューの金髪、すぐ王子さまみたいだから。
びっくりして何も言えなかったの。

「るり？」

「な、なんでもない」

ドキドキしてるなんて、誰にも知られたくない。

ラズ・ベネル（後書き）

ちよつと区切りのよい所で切ります。

久々の更新になってしまつて申し訳ありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9119m/>

ビート・メール

2011年11月15日03時03分発行